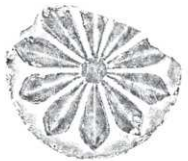
仙台市文化財調査報告書第493集

仙 台 城 跡 16

― 令和２年度　調査報告書 ―



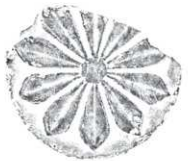
2021年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第493集

仙 台 城 跡 16

― 令和２年度　調査報告書 ―



2021年3月

仙台市教育委員会

登城路跡 1 区　全景（北東から）

登城路跡 1 区　路面整地層と KS-1185 石組溝（東から）

登城路跡 1 区　KS-1180 石列（北東から）

登城路跡 2 区　全景（西から）

登城路跡 2 区　KS-1178 石組側溝（南西から）

巻頭図版２

三の丸土塁１区　全景（北から）

三の丸土塁２区　全景（南から）

三の丸土塁１区　KS-1170 石列（南東から）

三の丸土塁２区　KS-1170 石列（南から）

登城路跡１区　大堀相馬産土瓶

登城路跡１区　肥前産染付長皿

登城路跡１区　菊丸瓦

三の丸土塁３区　菊丸瓦

序　　文

慶長５年（1600）に伊達政宗が仙台城の縄張りを開始し城下のまちづくりをおこなってから四百年余りを経た今、仙台市は人口 100 万人を越える東北地方の中心都市となりました。現在の仙台市発展の原点となった仙台城跡は、ビルが林立する都心部から最も近い緑豊かな場所として、青葉城や天守台といった愛称で市民から親しまれてきました。

仙台城跡は、平成９年度から 16 年度までおこなわれた本丸石垣修復工事に伴う発掘調査や、平成 13 年度から始められた国庫補助による学術調査によって、中世の山城であった千代城期や、伊達氏の居城期の内容が徐々に明らかとなってきました。これらの発掘調査から得られた成果により、わが国の近世を代表する城郭遺跡であることが評価され、平成 15 年８月、国の史跡に指定されました。

平成 23 年に発生した東日本大震災では、仙台城跡の石垣も大きな被害を受けましたが、伝統工法に基づく復旧に努め、文化財としての価値を損なうことなく後世に遺すことができました。また、平成 31 年１月に策定した「史跡仙台城跡保存活用計画」に基づき史跡仙台城跡の整備及び活用の推進を図るため、平成 17 年３月に策定された「仙台城跡整備基本計画」を見直し、新たに「史跡仙台城跡整備基本計画」を令和３年３月に策定しました。それに基づき、今後は「仙台城跡をより城郭らしく地域の誇りと愛着を育む場」にするべく取り組みを行っていくこととなります。

本報告書は、令和２年度の学術調査の成果をまとめたものです。今年度は、登城路跡と三の丸土塁の発掘調査を実施し、沢門下石垣の測量調査を行いました。登城路跡では、江戸期における路面と排水に関連する暗渠や石組溝を検出し、江戸期の登城路の構造と形状を知る手がかりを得ることができました。三の丸土塁では、土塀の基礎部分とみられる２時期の石列を検出し、絵図に描かれた土塀の存在を示す手がかりを得ることができました。今後の土塁整備に向けた非常に大きな成果と言えます。

最後になりましたが、今回の調査事業及び調査報告書の刊行にあたり、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。本報告書が研究者のみならず市民の皆様にも広く活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

令和３年３月

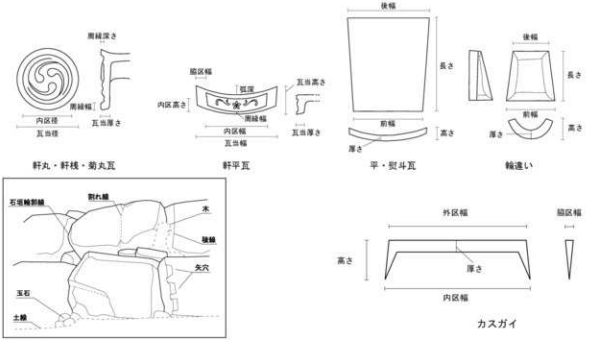
仙台市教育委員会
教育長　佐々木　洋

例　　言

1．本書は、文化庁の国庫補助事業として実施した、国史跡仲台城跡の令和２年度遺構確認調査（登城路跡第４次調査:全体35次調査、三の丸土塁第６次調査：全体36次調査、沢門下石垣第２次測量調査：全体37次調査）の報告書である。
2．本書に関わる国史跡仲台城跡の調査については、令和２年４月17日付元受文庁第４号の1984にて文化庁長官の許可を得て実施した。
3．発掘調査および整理作業は、須貝慎吾、加藤智仁（仲台市教育委員会文化財課）が担当した。
　本書の作成は、Ⅰ～Ⅲを加藤が、Ⅳ～Ⅴを須貝が執筆した。本書の編集は、須貝が行った。
4．出土陶磁器の鑑定は佐藤洋氏に依頼した。
5．沢門下石垣の計測・図化は国際航業株式会社仲台支店に委託して行った。
6．調査成果については既に各種刊行物などで公表されているが、本書の記載内容がそれら全てに優先する。
7．発掘調査および報告書作成にあたり、次の機関と方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝する。（敬称略・順不同）
　宮城県教育委員会文化財保護課、仲台市博物館、宮城県考古学会、金森安孝、佐藤洋、五十嵐貴久（山形市教育委員会）、齋藤仁（山形市教育委員会）、竹井英文（東北学院大学文学部准教授）、蟹澤聰史（東北大学名誉教授）、河本愛輝
8．本調査および報告書作成に係わる諸記録や出土遺物などの資料は、すべて仲台市教育委員会が保管・管理している。

凡　　例

1．本書中の地形図は、仲台市作成の現況測量図（1:500）の他に、国土地理院発行の1:50,000『仲台』と1:10,000地形図『青葉山』の一部を使用している。
2．本書の座標値は世界測地系に基づいており、図中の方位は座標北である。また、高さは標高値で記した。
3．遺構略号は、全遺構に対して通し番号（国庫補助調査による検出遺構番号：KS－　）を付した。
4．本報告書の土色については、『新版標準土色帳』（古山・竹原：2001）を使用した。
5．本書に使用した遺物図版の縮尺は、陶磁器類・土器類は1:3、瓦・レンガは1:6、石製品は1:2(水晶は小型のため1:1で掲載)を原則としており、その他の遺物は各図中に示している。遺構図版の縮尺については各図中に示している。
6．遺物観察表の中の法量で（　）で示した数値は、陶磁器類・土器類については推定復元値、その他の遺物については残存値を示している。また、「－」は計測不能を示している。
7．石垣の表記については以下の図の通りである。
8．遺物の計測部位については以下の図の通りである。



目　次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　仙台城跡の概要……4
　1. 地理的環境……4
　2. 歴史的環境……4
　3. 発掘調査……5
Ⅲ　仙台城跡の発掘調査の実績と計画……7
Ⅳ　第 35 次調査（登城路跡 4 次）……10
　1. 調査の概要……10
　2. 基本層序……10
　3. 1 区検出遺構……15
　4. 2 区検出遺構……21
　5. 出土遺物……25
　6. 考察……32
　7. まとめ……33
Ⅴ　第 36 次調査（三の丸土塁 6 次）……43
　1. 調査の概要……43
　2. 基本層序……44
　3. 1 区検出遺構……45
　4. 2 区検出遺構……48
　5. 3 区検出遺構……51
　6. 出土遺物……53
　7. まとめ……56
Ⅵ　第 37 次調査（沢門下石垣 2 次）……61
　1. 調査の概要……61
　2. 測量成果……64
　3. 出土遺物……64
　4. まとめ……65

報告書抄録

巻　頭　図　版　目　次

巻頭図版 1　1. 登城路跡 1 区全景（北東から）
　2. 登城路跡 1 区路面整地層と KS-1185 石組溝（東から）
　3. 登城路跡 1 区 KS-1180 石列（北東から）
　4. 登城路跡 2 区全景（西から）
　5. 登城路跡 2 区 KS-1178 石組側溝（南西から）

巻頭図版 2　6. 三の丸土塁 1 区全景（北から）
　7. 三の丸土塁 2 区全景（南から）
　8. 三の丸土塁 1 区 KS-1170 石列（南東から）
　9. 三の丸土塁 2 区 KS-1170 石列（南から）
　10. 登城路跡 1 区　大堀相馬土瓶
　11. 登城路跡 1 区　肥前染付長皿
　12. 登城路跡 1 区　菊丸瓦
　13. 三の丸土塁 3 区　菊丸瓦

挿図目次

第 1 図　仙台城跡と周辺の遺跡……2
第 2 図　仙台城跡周辺地形図……3
第 3 図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図…8
第 4 図　三の丸（東丸）周辺　第 35 ～ 37 次調査区位置と周辺調査……9
第 5 図　1 区断面模式図……12
第 6 図　2 区断面模式図……12
第 7 図　1 区平面図……13・14
第 8 図　1 区近・現代遺構平面図……15
第 9 図　1 区断面図 (1)……16
第 10 図　1 区断面図 (2)……17
第 11 図　KS-1180 エレベーション図……17
第 12 図　KS-1185 石組溝……20
第 13 図　2 区近・現代遺構平面図……21
第 14 図　2 区平面図・断面図……22
第 15 図　2 区断面図……23
第 16 図　KS-1178 石組側溝……24
第 17 図　第 35 次調査（登城路跡）出土遺物 (1)…27
第 18 図　第 35 次調査（登城路跡）出土遺物 (2)…28
第 19 図　第 35 次調査（登城路跡）出土遺物 (3)…29
第 20 図　第 35 次調査（登城路跡）出土遺物 (4)…30
第 21 図　第 35 次調査（登城路跡）出土遺物 (5)…31
第 22 図　登城路跡主要検出遺構変遷案……32
第 23 図　巽門跡から清水門跡周辺の遺構配置図…34
第 24 図　仙台城絵図（三の丸（東丸）土塁北東部）と調査区……43
第 25 図　1 区平面図・断面図……46
第 26 図　1 区断面図……47
第 27 図　2 区平面図……48
第 28 図　2 区断面図……49
第 29 図　1・2 区遺構平面図……50
第 30 図　3 区平面図……51
第 31 図　3 区断面図 (1)……52
第 32 図　3 区断面図 (2)……53
第 33 図　第 36 次調査（三の丸土塁）出土遺物 (1)・54
第 34 図　第 36 次調査（三の丸土塁）出土遺物 (2)・55
第 35 図　1 ～ 3 区堀跡に関連する遺構平面図……56
第 36 図　仙台城絵図（沢門・沢曲輪跡周辺）と調査地……61
第 37 図　立面図・立面オルソフォト……62
第 38 図　縦断図・横断図……63
第 39 図　石垣面に見られる積み方の違い……64
第 40 図　沢門下石垣前面採取遺物……65

表目次

第 1 表　仙台城の沿革……6
第 2 表　これまでの調査実績……7
第 3 表　調査計画表と調査実績表……7
第 4 表　1 区土層注記表……18
第 5 表　2 区土層注記表……23
第 6 表　第 35 次調査出土遺物集計表……26

写真図版目次

図版 1 ～ 5　第 35 次（登城路跡）……35
図版 6 ～ 8　第 35 次（登城路跡）遺物……40
図版 9 ～ 11　第 36 次（三の丸土塁）……57
図版 12　第 36 次（三の丸土塁）遺物……60
図版 13　第 37 次（沢門下石垣）……66

Ⅰ．はじめに

令和２年度は、国庫補助による仙台城跡遺構認調査を下記の体制で臨んだ。

調査主体　仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室）

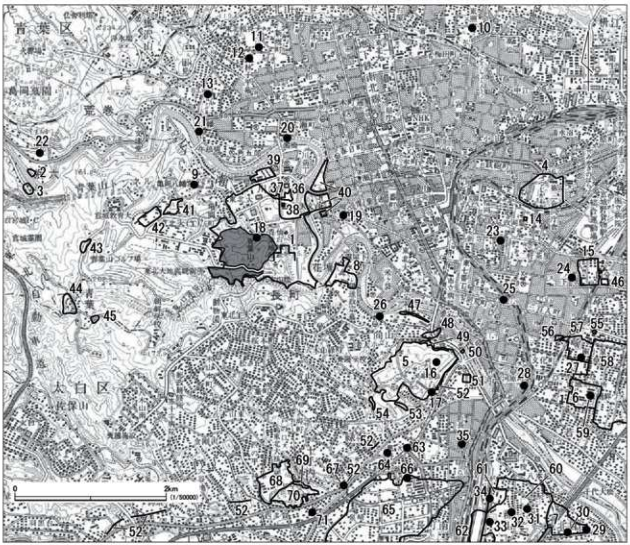
調査担当　文化財課　課長　長島　栄一　　仙台城史跡調査室長　鈴木　隆
主任　齋藤　俊義　　主任　加藤　智仁
主事　須貝　慎吾　　主事　佐藤　恒介

発掘調査、整理作業を適正に実施するために調査・整備委員会を設置し、指導・助言を受けた。
（五十音順）

委員長　藤澤　敦（東北大学教授）※
副委員長　北野　博司（東北芸術工科大学教授）※
委員　奥村　聡子（一般社団法人東北観光推進機構推進本部　本部長代理）
委員　籠橋　俊光（東北大学准教授）※
委員　佐浦　みどり（有限会社東北工芸製作所　常務取締役）
委員　佐々木　貴弘（国土交通省東北地方整備局建政部　都市調整官）
委員　渋谷　セツコ（建築と子供たちネットワーク仙台　副代表）
委員　永井　康雄（山形大学教授）※
委員　深澤　百合子（東北大学名誉教授）※

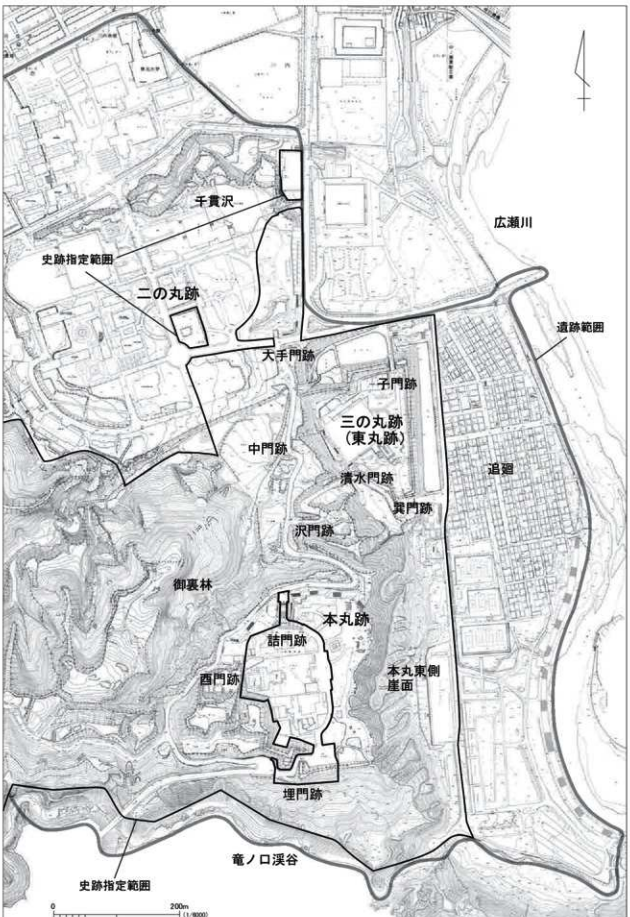
仙台城跡調査・整備委員会開催日
第４回：令和２年７月３日（資料送付のみ）
第５回：令和３年３月18日
仙台城跡調査・整備委員会調査部会開催日
令和２年８月28日（出席者は名前に※表示）

調査および整理参加者　浅野壱斗、追木愛美、太田裕子、桂島通子、菅家緋美子、菅野良子、工藤将喜、鹿野麗子、高橋克也、田中春美、沼崎雅弘、増田瑞枝、松田進、村上景亮、山口沙織、結城龍子



城館跡		23	成覚寺板碑	47	愛宕山横穴墓群A地点
1	仙台城跡	24	陸奥国分寺五輪塔	48	愛宕山横穴墓群B地点
2	葛岡城跡	25	三宝荒神社板碑群	49	大年寺山横穴墓群
3	郡六御殿跡	26	長徳寺板碑	50	宗淵寺横穴墓群
4	国分尼館跡	27	猫塚古墳・少林神社板碑群	51	兜塚古墳
5	茂ヶ崎城跡	28	古城神社板碑	52	杉土手（鹿除土手）
6	若林城跡	29	古峯神社板碑	53	茂ケ崎横穴墓群
7	北目城跡	30	宅地古碑群	54	二ツ沢横穴墓群
神社・寺院・墓所等		31	郡山三丁目古碑群	55	法領塚古墳
8	経ケ峯伊達家墓所	32	八幡社古碑群	56	保春院前遺跡
9	亀岡八幡神社	33	長町駅裏古碑群	57	養種園遺跡
10	東照宮	34	西台畑板碑群	58	南小泉遺跡
11	政宗灰塚	35	蛸薬師古碑群	59	朝鮮ウメ
12	林子平墓	その他の主な遺跡		60	郡山遺跡
13	大崎八幡神社	36	川内A遺跡	61	西台畑遺跡
14	三沢初子の墓など	37	川内B遺跡	62	長町駅東遺跡
15	陸奥国分寺跡	38	川内C遺跡	63	一塚古墳
16	大年寺山伊達家墓所	39	川内武家屋敷遺跡	64	二塚古墳
17	大年寺塑門	40	桜ケ丘公園遺跡	65	富沢遺跡
板碑・石碑		41	青葉山B遺跡	66	金剛八幡古墳
18	川内古碑群	42	青葉山E遺跡	67	砂押古墳
19	片平仙台大神宮の板碑	43	青葉山C遺跡	68	芦ノ口遺跡
20	瀧不動尊文永十年板碑	44	青葉山A遺跡	69	土手内横穴墓群
21	延元2年板碑	45	青葉山D遺跡	70	三神峯遺跡
22	郡六大日如来の碑	46	薬師堂東遺跡	71	裏町古墳

第1図　仙台城跡と周辺の遺跡



第 2 図　仙台城跡周辺地形図

Ⅱ．仙台城跡の概要

1．仙台城跡の地理的環境

仙台城跡は仙台市の中心市街地の西方にある、青葉山丘陵及びその麓の河岸段丘部分を中心に城域が形成されている近世城郭である。仙台城跡は、本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれ、それぞれ異なる段丘面に造られている。

本丸は青葉山丘陵の高位段丘である青葉山段丘面（標高 115 ～ 138m）に位置する。正保 2 年（1645）の「奥州仙台城絵図」には「東西百三十五間、南北百四十間」とあり、一間を六尺として換算すると東西 245m、南北 267m となる。本丸は南側に落差約 40m の竜ノ口渓谷、東側には広瀬川に落ちる 60m 以上の断崖があり、自然的要因に守られた天然の要害になっている。比較的傾斜の緩やかな本丸の北側には約 17m の高さを有する石垣が築かれている。尾根続きになっている本丸西側には 3 条の大規模な堀切が確認されている。その奥には藩政期には立ち入りが禁じられていた「御裏林」と呼ばれた森林が広がっており、今でも貴重な自然が現存していることから、昭和 47 年（1972）に国指定天然記念物「青葉山」に指定され、現在は東北大学植物園となっている。

二の丸は、本丸の北西に位置する一段下がった仙台上町段丘（標高 54 ～ 71m）にある。広瀬川に向かって流れる二つの沢に挟まれ、御裏林を背に立地している。東側の大手門跡付近には高さ約 9m の石垣が残り、その南側には大手門脇櫓が昭和 42 年（1967）に再建されている。

東丸とも呼ばれた三の丸は本丸の北東に位置し、二の丸よりさらに下がった仙台下町段丘上（標高 40m 程度）に立地している。外郭の北側と東側を水堀と土塁に囲まれ、南側からは本丸へと上る登城路として巽門から清水門、沢曲輪、沢門と続いている。三の丸東側のさらに低位の段丘面には追廻地区があり、重臣の屋敷や馬場が広がっていた。その東を流れる広瀬川の岸部分には石垣が残存している。

2．仙台城跡の歴史的環境

(1) 仙台城築城以前の歴史的環境

仙台城築城以前の遺跡として、後期旧石器時代から古代にかけての遺跡である、青葉山 A ～ E 遺跡がある。特に青葉山 E 遺跡では縄文時代の遺構・遺物がまとまって見つかっている。また、仙台城跡二の丸に隣接する川内 A 遺跡や川内 B 遺跡からも縄文時代の遺物が出土している。仙台城跡が立地する青葉山にはかつて寺院があったとする伝承があり、愛宕山の大満寺虚空蔵堂は仙台城築城に伴って現在の地に移転したとされる。御裏林の中には、川内古碑群があり、中世期における仙台城跡周辺が宗教的な場であったことを物語っている。伊達政宗による仙台城築城以前には、国分氏がこの地域を治めていた。その国分氏の居城である「千代城」に関する 16 世紀代の文献記録では、天正年間（1573 ～ 1592）以降は廃城となったとされている。平成 10 年（1998）の本丸北壁石垣修復工事に伴う調査では、政宗の築いた仙台城とは異なる時代の虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出されていることから、仙台城跡にはその前身となる中世山城が存在していたことが想定される。

(2) 仙台城の歴史的環境

仙台城は仙台藩初代藩主伊達政宗によって築かれ幕末まで藩政の中心として維持された城である。慶長 5 年（1600）12 月 24 日には縄張りが開始され、慶長 7 年（1602）5 月には一応の完成をみたとされる。築城当初の仙台城は未解明の部分が多いが、千代城の縄張りを改変したもので、それまで千代と呼ばれていたこの地を政宗が築城の際に仙台と改めたとされている。絵図や文献によれば本丸には、慶長 15 年（1610）に完成した大広間を中心とする御殿建物群が存在していた。東側の城下を見下ろす崖に造られた懸造、能舞台や書院など、上方から招いた当代一流の大工棟梁・工匠・画工等によって作られた桃山文化の集大成と言える建物群が威容を誇っていたと考えられる。

築城期の本丸は現在見られる本丸の縄張りと異なっていることが明らかになっており、現在の本丸の縄張りとなるのは寛文 8 年（1668）の地震により被災した石垣の修復後と考えられる。また、西脇櫓・東脇櫓・艮櫓・巽櫓などの三重の櫓は、正保 3 年（1646）4 月の地震によって倒壊したとする記事がみられ、以後再建されなかった。後に二の丸となる山麓部には、政宗の四男である伊達宗泰や長女である五郎八姫の屋敷があったと考えられ、それを裏付けるよ

うな遺構や遺物が見つかっている。寛永13年（1636）政宗の死後、二代藩主忠宗は宗泰の屋敷があったとされている場所に二の丸の造営を開始した。それ以降はこの二の丸が藩政の中心となり、三の丸（東丸）・重臣武家屋敷などが一体となって城域を形成していた。また、二の丸は貞享4年（1687）から元禄13年（1700）にかけて四代藩主綱村によって大きな改造が行われ、仙台城の基本的な構成が完成することとなる。

三の丸（東丸）には、築城当初は政宗の私邸的屋敷があったと考えられる。三の丸周囲には水堀と土塁がめぐり、現在も残存している。二の丸が造営された寛永年間には米蔵が置かれたと考えられる。また、政宗が酒造りをさせた造酒屋敷が置かれた三の丸南側の巽門と清水門に隣接する平場からは、井戸跡も確認されている。

(3) 仙台城廃城後の歴史的環境

仙台城は、明治2年（1869）の版籍奉還を受けて二の丸に明治政府の勤政庁が置かれ、明治4年（1871）には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれることとなった。それらの庁舎には二の丸の殿舎が利用されていたが、明治15年（1882）の大火によって全て焼失した。本丸も東北鎮台の管理下に置かれ、建物群は明治の初め頃に取り壊されたようであるが、正確な年月は不明である。

明治21年（1888）に仙台鎮台は陸軍第二師団となり、二の丸には師団司令部が置かれる。一方で本丸には、明治35年（1902）に昭忠碑、明治37年（1904）に仙台招魂社が建立された。招魂社は昭和14年（1939）に宮城縣護國神社となった。

仙台城の面影を残していた中門は大正9年（1920）に取り壊され、国宝の大手門および脇櫓、巽門は昭和20年（1945）の仙台空襲によって焼失した。現在では大手門北側の土塀が江戸時代からの姿を残しているのみである。戦後、仙台城跡は米軍の駐屯地となり、中島池などが埋め立てられるなど造成が行われた。昭和32年（1957）に米軍から土地が返還されると二の丸のほとんどは東北大学が使用することとなった。三の丸には昭和36年（1961）に仙台市博物館が建設された。昭和42年（1967）には大手門脇櫓が再建されている。本丸は神社敷地となっているほかは青葉山公園として利用されている。

3. 仙台城跡の発掘調査

仙台城跡の調査は、昭和58年（1983）に実施された東北大学構内の施設整備に伴う二の丸跡の発掘調査と、仙台市博物館の改築工事に伴って昭和58・59年（1983・1984）に実施された三の丸跡の発掘調査から始まる。

本丸北壁の石垣は昭和30年代から変形が目立ち始め、防災上の観点により平成9年（1997）から石垣修復工事が行われた。石垣の解体に伴って行われた本丸跡の発掘調査により、現存石垣（Ⅲ期石垣）背面より2時期にわたる旧石垣（Ⅰ期・Ⅱ期石垣）が検出され、石垣の変遷が明らかになった。

平成13年（2001）からは国の補助を受け、発掘調査のほかに遺構現況調査や石垣測量などの総合調査を実施している。平成17年（2005）からは、三の丸（東丸）土塁における石垣や土塀等の遺構確認のための調査を実施しており、土塁の構成などが明らかになりつつある。また、巽門の上の平場にある造酒屋敷跡を対象とした調査では、仙台藩の御用酒屋であった樋森家の屋敷跡や酒造りに使われたと考えられるカマド跡も検出された。このように、令和2年（2020）3月現在で34次にわたる調査を実施している。

平成15年（2003）5月に三陸沖を震源とする地震により、中門跡と清水門跡の石垣の一部が被災し、平成15～17年（2003～05）に災害復旧工事を行った。平成23年（2011）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）では本丸跡と周辺屋地、大手門脇櫓、酉門、中門、清水門の石垣などが被災し、平成23～28年に災害復旧工事を行った。

第１表　仙台城の沿革

時期	年号	西暦	主な出来事
二の丸造営以前	天文６年	1537	千代城として国分氏の居城が存在、仙台城の前身
	慶長５年	1600	政宗、千代を仙台と改め、城普請の縄張を行う
	慶長６年	1601	政宗、仙台城普請を開始し、自らも仙台に移る（築城開始）（第Ⅰ期石垣）
	慶長８年	1603	政宗、仙台城に入城する
	慶長 13 年	1608	城内に御用酒屋が造られる
	慶長 15 年	1610	仙台城大広間・懸造・書院・能舞台が完成する
	元和２年	1616	地震により本丸石垣・櫓（櫓などか）が被害を受ける
			政宗による修復が始まる（第Ⅱ期石垣）
	元和６年	1620	松平忠輝の改易により、五郎八姫が江戸屋敷に帰され、二の丸殿宗泰屋敷の北側に西屋敷の造営が始まる
	寛永 13 年	1636	政宗、江戸桜田邸で死去。忠宗二代藩主となる
	慶長５年～寛永 15 年	1600 ～ 1638	現三の丸（東丸）は政宗の下屋敷であったと考えられる
二の丸造営後	寛永 15 年	1638	二代藩主忠宗により、二の丸の普請を開始（1639 年６月完成）
	正保２年	1645	現三の丸（東丸）は『奥州仙台城絵図』に「蔵屋敷」と記載される
	正保３年	1646	地震により本丸石垣が崩れ、櫓が倒壊する
	寛文４年	1664	現三の丸（東丸）は『仙台御城下絵図』に「御米蔵」と記載される
	寛文８年	1668	地震により、仙台城本丸石垣が崩れる
			四代藩主綱村による修復が始まる（第Ⅲ期石垣）
	寛文９年	1669	現三の丸（東丸）は『仙台城下絵図』に「御米蔵」と記載される
	寛文 11 年	1671	寛文事件（伊達騒動）起こる
	天和２年	1682	現三の丸（東丸）は『奥州仙台城並城下絵図』に「東丸」と記載される
	元禄４年	1691	現三の丸（東丸）は 1686 ～ 1694 年頃の『御修覆帳』に「三之御丸御米蔵」と記載される。「三の丸」の名称の初現
	元禄年間	17 世紀末	二の丸が大改修され、中奥が拡張される
	宝永７年	1710	現三の丸（東丸）は 1711 ～ 1749 年頃の『御修覆帳』に「三丸御米蔵」と記載される
	享保 15 年	1730	現三の丸（東丸）は『陸奥国仙台城普請竊』に「東丸」と記載される
	文化元年	1804	雷火のため二の丸全焼し、再建される
	文化２年	1805	九代藩主周宗、二の丸再建に着手（1809 年４月完成）
近代以降	明治元年	1868	仙台藩降伏
	明治２年	1870	版籍奉還に伴い、二の丸に勤政庁を設置
	明治４年	1871	東北鎮台（後の仙台鎮台）を仙台城二の丸に移し、明治７年頃までに仙台城本丸が破却される
	明治 15 年	1882	仙台鎮台（後の第二師団）の失火により二の丸建物は焼失し、その跡地に陸軍第二司令部が建てられる
	昭和６年	1931	大手門・脇櫓を国宝指定
	昭和 20 年	1945	仙台空襲によって、大手門・脇櫓、巽門焼失
	昭和 40 年	1965	大手門脇櫓建設着工（1967 年 12 月完成）
	平成９年	1997	石垣修復工事に伴う仙台城本丸跡の発掘調査を開始する
	平成 13 年	2001	本丸大広間などの発掘調査を開始する
	平成 15 年	2003	仙台城跡史跡指定
	平成 16 年	2004	仙台城本丸跡石垣修復工事完成
	平成 23 年	2011	東日本大震災により石垣・土塀、崖面などが被害を受ける
	平成 28 年	2016	地震被害からの災害復旧工事が完了する

Ⅲ．仙台城跡の発掘調査の実績と計画

令和２年度は、仙台城跡整備に向けて登城路跡（第４次）と、三の丸土塁（第６次）の遺構確認調査と沢門下石垣測量（２次）を実施した。

第２表　これまでの調査実績

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	大広間跡(1次)	185㎡	平成13年 9月17日～12月27日
第２次	清水門跡付近石垣測量	210㎡(立面)	平成13年11月30日～平成14年 2月13日
第３次	大番士土手跡・御守殿跡・整造跡	1,400㎡	平成14年 5月20日～平成15年 1月31日
第４次	巽櫓跡	110㎡	平成14年 5月20日～ 8月31日
第５次	大広間跡(2次)	470㎡	平成14年 8月 5日～12月20日
第６次	仙台城跡(全域)	約145ha	平成15年 5月 7日～ 8月 8日
第７次	大広間跡(3次)	258㎡	平成15年 8月 4日～12月25日
第８次	登城路跡 (1次)	58㎡	平成15年11月12日～12月25日
第９次	広瀬川護岸石垣測量 (1次)	50㎡(立面)	平成15年12月 9日～平成16年 2月 5日
第10次	大広間跡(4次)	397㎡	平成16年 7月20日～12月24日
第11次	登城路跡 (2次)・広瀬川護岸石垣測量(2次)	349㎡(立面)	平成16年12月18日～平成17年 3月31日
第12次	大広間跡(5次)	446㎡	平成17年 5月26日～10月19日
第13次	三の丸堀跡(1次)・三の丸土塁 (1次)	86㎡	平成17年11月 1日～12月22日
第14次	中門北側・広瀬川護岸石垣測量(3次)	627㎡	平成18年 1月16日～ 1月20日
第15次	大広間跡(6次)	311㎡	平成18年 6月 1日～ 8月 4日
第16次	三の丸堀跡(2次)・三の丸土塁 (2次)	522㎡	平成18年 9月 1日～11月30日
第17次	大広間跡(7次)	263㎡	平成19年 5月28日～ 8月 3日
第18次	三の丸堀跡(3次)	468㎡	平成19年 9月 1日～11月26日
第19次	本丸北西壁石垣測量(1次)	425㎡(立面)	平成20年 1月16日～ 1月18日
第20次	大広間跡(8次)	248㎡	平成20年 5月 8日～ 7月31日
第21次	造酒屋敷跡(1次)	160㎡	平成20年 8月26日～10月29日
第22次	本丸北西壁石垣測量(2次)	448㎡(立面)	平成20年12月24日～平成21年 1月21日
第23次	造酒屋敷跡(2次)	369㎡	平成21年 7月 1日～11月12日
第24次	大広間跡(9次)	2.25㎡	平成21年12月14日～12月15日
第25次	広瀬川護岸石垣測量(4次)	250㎡(立面)	平成21年12月16日～平成22年 1月 7日
第26次	造酒屋敷跡(3次)	369㎡	平成22年 6月 1日～10月31日
第27次	造酒屋敷跡(4次)	173㎡	平成28年 6月15日～10月31日
第28次	造酒屋敷跡(5次)	110㎡	平成29年 7月 5日～11月15日
第29次	三の丸土塁(3次)	25㎡	平成29年 9月 4日～11月15日
第30次	造酒屋敷跡(6次)	357㎡	平成30年 6月25日～11月29日
第31次	三の丸土塁(4次)	17㎡	平成30年10月 1日～11月29日
第32次	登城路跡(3次)	19㎡	令和元年 7月 1日～11月 7日
第33次	三の丸土塁(5次)	37㎡	令和元年 7月 1日～11月 7日
第34次	清水門北側石垣測量 (2次)	34㎡	令和元年 7月 2日～12月20日

令和２年度実施した第35次調査は、巽門の北側に過去の調査区と隣接する形で２か所調査区を設定した。仙台城が築城された当時の登城路の広がりと、遺構の有無を確認することを目的とした。第36次調査は、江戸時代の土塁の形状の確認、土塁上の遺構の有無の確認などの目的で行った。第37次調査は、沢門下石垣の現況確認および整備のための基礎データの収集を目的とした。

第３表　調査計画表と調査実績表

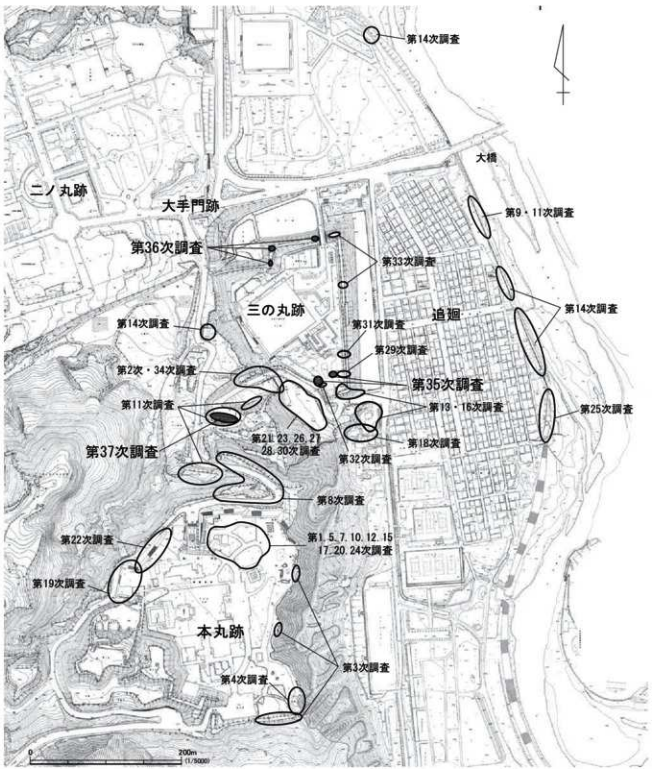
調査次数	調査予定地区	予定面積	調査面積	調査予定期間	調査期間
第35次	登城路跡(4次)	104㎡	113㎡	令和２年 5月11日～ 9月11日	令和２年 5月11日～10月 9日
第36次	三の丸土塁(6次)	56㎡	60㎡	令和２年 5月11日～ 9月11日	令和２年 5月11日～10月 9日
第37次	沢門下石垣測量 (2次)	124㎡	126㎡	令和２年 5月22日～12月18日	令和２年 7月 2日～12月18日

※沢門下石垣測量については、平成16年度に実施した第11次調査における沢門下石垣測量を1次とする。

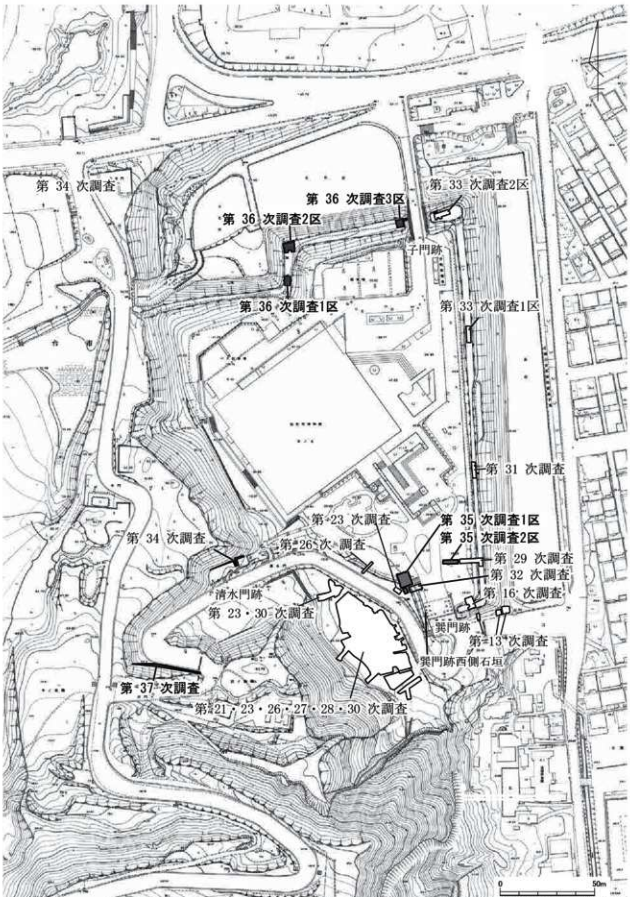
第35次調査では、巽門から清水門へと向かう登城路の路面を検出した。それに伴い、路面の下からは暗渠や石組溝など見つかっている。遺物は瓦、磁器、陶器、木製品、金属製品、ガラス製品などが出土した。

第36次調査では、時期の異なる2条の石列遺構を検出した。土塁上に築かれた塀に関連する遺構と考えられる。仙台城跡において、土塁上に位置する塀跡の遺構は初めての検出となる。遺物は瓦、磁器、陶器、金属製品などが出土した。

第37次調査では、沢門下の石垣を対象にレーザー測量を行い、立面図および縦横断図の作製を行った。



第3図　仙台城跡遺構確認調査・調査区位置図（1/5000）



第 4 図　三の丸（東丸）周辺　第 35 ～ 37 次調査区位置と周辺調査（1/2000）

Ⅳ　第 35 次調査（登城路跡 4 次）

1. 調査の概要

(1) 調査目的

仙台城跡第 35 次調査（登城路跡第 4 次調査）は、登城路跡の遺構確認と実態解明に向けて行った調査である。これまでの登城路跡の調査は、沢門跡周辺から本丸詰門跡にかけて行われたが、今回は特に、巽門跡から清水門跡へ至る登城路跡の実態解明のため、昨年の第 32 次調査で検出された巽門跡西側石垣の延長部分とともに登城路の路面を確認することを目的とした。調査区は、巽門跡北西と北東に 2 箇所設定した。

(2) 調査方法

1 区は巽門跡の北側約 15m 離れた箇所に、2 区は巽門跡の北東側約 25m 離れた箇所に設定した。調査を開始するにあたり、災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を使用した。これらの基準点を基に、調査区の北側と西側の 2 箇所に任意の基準点を設置し、世界測地系座標と標高値を求めた。測量などはそれら基準点を使用した。

調査区設定後には、表土および近現代の盛土層を人力及び一部重機で除去した。その後は、人力により遺構検出を行った。基本的に近世上層面の 1 面のみの調査にとどめたが、近代遺構の範囲や攪乱の箇所を利用して、一部で下層遺構の確認を行っている。遺構の平面図は、調査区周辺に設置した基準点を基に、縮尺 20 分の 1 で作図した。土層断面図については、任意の基準点を設定して作図し、設定した基準点の座標値を計測し、平面図に合成した。今回の調査では、写真撮影にデジタル一眼レフカメラを用いた。遺構堆積土については、保存の観点から、半裁もしくは部分的な掘削にとどめている。調査区の埋め戻しは、遺構を保護するため全面に不織布を敷き、調査区全体を厚さ 10cm 程度の山砂で覆い、その後掘削土を転圧しながら埋め戻して旧状に戻した。

(3) 調査経過

現地調査は、5 月 1 日までに機材の準備および調査区の設定を行い、5 月 11 日にフェンス等を設置した。1 区・2 区共に 6 月 11 日から掘削を開始した。8 月 25 日には 2 区で KS-1178 石組側溝を検出している。9 月 10 日には 1 区で支障となっていた調査区内の木を伐採し、次いで想定よりも厚い近現代の盛土を確認したため同日、重機により掘削を行い盛土を除去した。9 月 16 日には 1 区で登城路に伴う路面を確認し、その上面から KS-1180 石列を検出している。9 月 17 日には、1 区北側で近代溝跡の下層から KS-1179 暗渠および KS-1185 石組溝跡を検出した。この段階で路面下の地山層を確認し、路面の堆積状況を確認することができた。遺構の記録は平面図作製後、写真撮影を行った。10 月 6 日には調査区全景の写真撮影を行った。10 月 8 日より山砂を入れて遺構を養生した後に埋め戻しを開始し、翌日には完了し、10 月 9 日にはフェンス等を撤去して現地調査を終了した。

(4) 普及活動

普及活動として、遺跡見学会と調査成果の発表を予定していたが、令和 2 年 3 月より全国的に広まった新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止とした。遺跡見学会は、現地開催を行わず調査成果の資料を市のホームページに掲載する予定である。宮城県考古学会主催の遺跡調査成果発表会は実施されなかったため、資料集に発掘調査の成果を掲載している。

2. 基本層序

1 区と 2 区において堆積状況が大きく異なるため、それぞれの調査区で基本層名を付した。以下、区毎にその特徴を記述する。

(1) 1 区

1 区では大別 8 層、細別 26 層の基本層を確認した。Ⅰ～Ⅳ層は近・現代の堆積土、Ⅴ～Ⅶ層は近世の整地層、Ⅷ層は自然堆積土層（地山）である。

Ⅰ層（表土）

2 層に細分した層で、現代の堆積土と考えられる。

Ⅱ層（現代の堆積土）

3層に細分した。KS-1175溝跡埋没後の堆積土で、空襲による焼土と溶解したガラス片を多く含むことから第二次世界大戦後の整地土である。

Ⅲ層（近代の堆積土）

5層に細分した。ガラス片やレンガ片を含む一方、溶解したガラス片を含まないことから第二次世界大戦以前の整地土である。また第32次調査で確認されたKS-1155石垣の延長部分で、一連の石垣が崩落したものとみられる。石材を多く含む。Ⅲ層から19世紀中葉～20世紀の瀬戸美濃産端反碗、大堀相馬産鉢が出土している。

Ⅳ層（近代の整地層）

5層に細分した。ガラス片やレンガ片を含み、Ⅳa上面は、硬化していることから、近代の路面と考えられる。KS-1155石垣の延長と推定したKS-1187石積の構築面である。またⅣa層上面から、現代の道路と平行するKS-1175近代溝跡が掘り込まれている。Ⅳ層は明治30年代に本丸（招魂社）へ向かう参拝道（現在の市道）として整備される以前の路面と考えられる。

Ⅴ層（近世の整地層）

3層に細分した。Ⅴa層上面は硬化しており登城路の路面と考えられる。砂質土の直下は、薄く脆い凝灰岩が3～5㎝の厚さで敷き詰められている。Ⅴa層上面から、19世紀前半から中頃の大堀相馬産土瓶（第18図5）が出土している。Ⅴb層上面から掘り込まれたKS-1179暗渠は、路面構築に伴い設置された登城路の排水処理施設と考えられる。この暗渠からは、18世紀の大堀相馬産碗が出土している。

Ⅵ層（近世の整地層）

2層に細分した。Ⅴ層同様にⅥa層上面は硬化しており登城路の路面と考えられる。下層にある登城路の路面と判断した。Ⅵa層上面で、路面に伴うKS-1185石組溝跡を検出し、構築した際の堆積土から17世紀初頭～前葉の唐津産皿（第18図1）が出土している。

Ⅶ層（近世の整地層）

2層に細分した。黒褐色の粘質土が主体である。遺物は出土していない。自然堆積土であるⅧ層の直上にあたることから、登城路造成に関わる最初の整地層である可能性がある。

Ⅷ層（自然堆積土）

3層に細分した。灰色の砂質シルトが主体である。段丘堆積物の一部である可能性がある。

（2）2区

2区では大別8層、細別19層の基本層を確認した。Ⅰ～Ⅳ層は近・現代の堆積土、Ⅴ～Ⅶ層は近世の整地層、Ⅷ層は自然堆積土層（地山）である。

Ⅰ層（表土）

3層に細別した。山砂と化学繊維ネットが敷設されており、昭和61年（1986）に仙台市博物館が改築された際の整地層である。

Ⅱ層（現代の堆積土）

4層に細分した。溶解したガラス片を含むことから、第二次世界大戦後の堆積土と考えられる。Ⅱa層は昭和36年（1961）に建設された旧博物館周辺の舗装路で、上面にはKS-1176コンクリート縁石が構築されている。第二師団関係の建物解体から昭和61年（1986）の仙台市博物館改築頃までの整地層と考えられる。

Ⅲ層（近代の堆積土）

3層に細分した。ガラス片やレンガ片を含むが溶解したガラス片を含まないことから第二次世界大戦以前の整地土である。Ⅲa層から第二師団関連遺構のKS-1182溝跡が掘り込まれている。

Ⅳ層（近代の堆積土）

3層に細分した。にぶい黄橙ないし褐色の砂質シルトが主体である。第二師団期の盛土と考えられる。

Ⅴ層（近世の整地層）

にぶい黄褐色砂質シルトが主体である。19世紀前半の肥前産つる首瓶（図版6-13）が出土しているため、19世紀以降の年代が考えられる。Ⅴ層上面でKS-1178石組側溝跡が設けられる。

Ⅵ層（近世の整地層）

2層に細分した。明黄褐色粘質シルトが主体である。KS-1178石組側溝跡の根石がある、近世の整地層であり、17世紀前半の織部皿（図版6-23）が出土している。

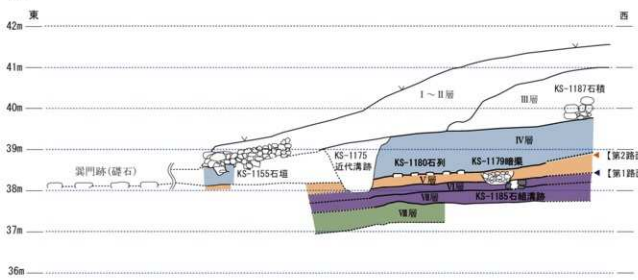
Ⅶ層（近世の整地層）

2層に細分した。黒褐色粘質土が主体である。瓦片が1点出土したことから人為的な整地層と判断した。1区で確認したⅦ層に対応する土層とみられ、登城路の造成に伴う整地層である可能性がある。

Ⅷ層（自然堆積土）

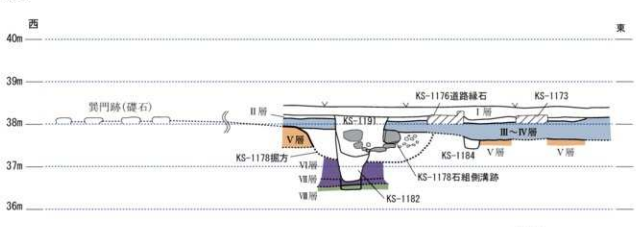
オリーブ黒色シルト質砂層が主体である。段丘堆積物の一部である可能性がある。

1区

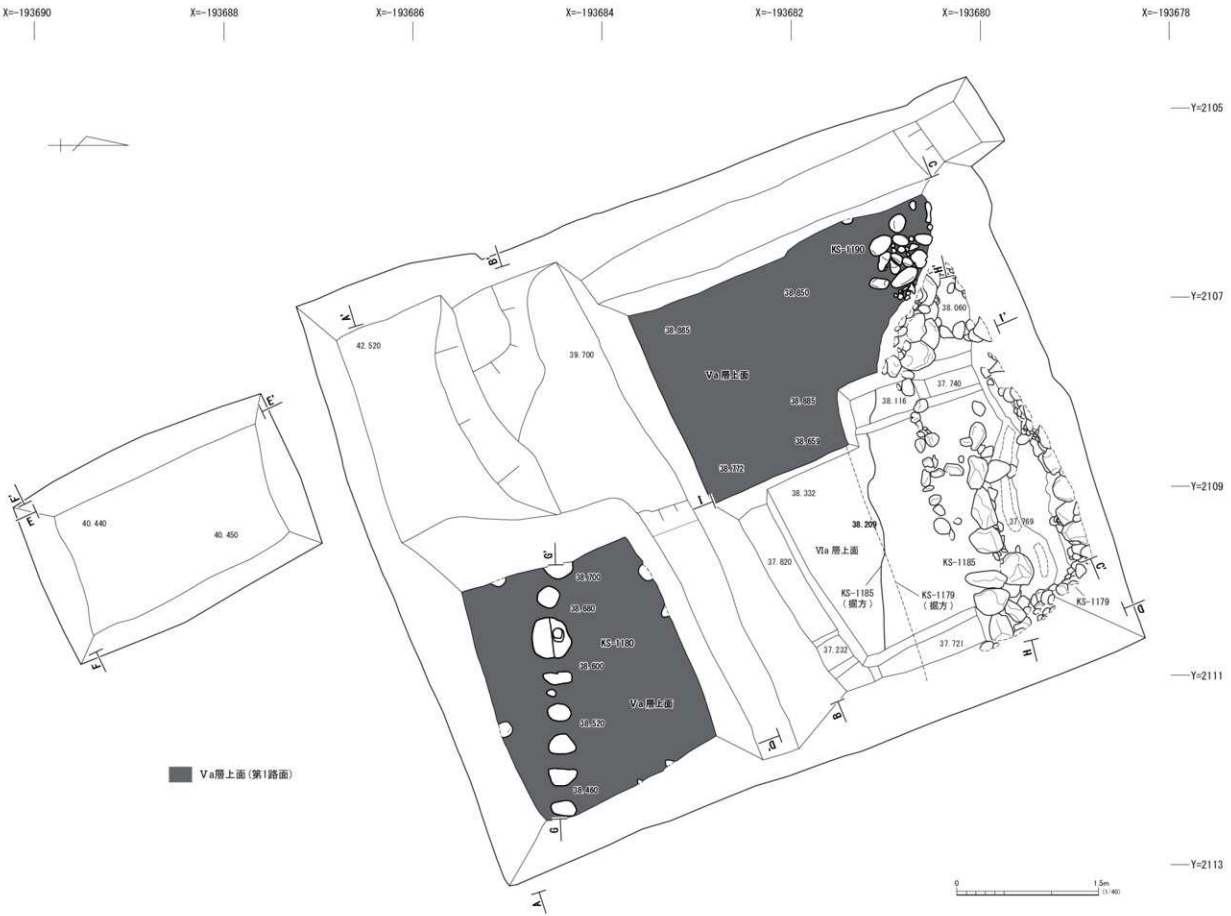


第5図　1区断面模式図

2区



第6図　2区断面模式図


X=-193690
X=-193688
X=-193686
X=-193684
X=-193682
X=-193680
X=-193678
Y=2105
Y=2107
Y=2109
Y=2111
Y=2113
KS-1190
38.650
38.883
Va 層上面
38.885
38.658
38.772
38.332
38.209
VIa 層上面
37.820
KS-1185
KS-1185
（掘方）
KS-1179
（掘方）
KS-1179
37.232
37.721
37.769
37.740
38.116
38.060
42.520
39.700
38.700
38.680
KS-1180
38.600
38.520
38.480
40.440
40.450
Va層上面（第1路面）
0
1.5m
(1/40)

第 7 図　1 区平面図

3．1 区検出遺構

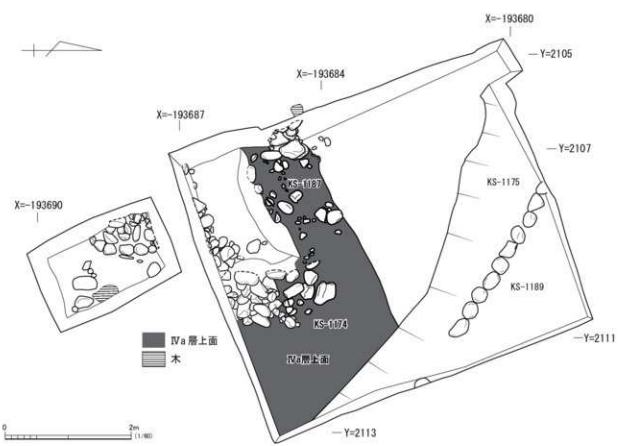
(1) 近現代の遺構

KS-1175 溝跡　北東部で確認した。掘り込み面はⅣ層上面である。規模は上端幅 2.5m 以上、深さ 94 ㎝で、方向は、N-19° -E である。延長方向は、調査区の西を通る市道の方向と平行する。堆積土はすべて水性堆積土であるため、第 30 次調査で確認された KS-1132 溝跡と関連する、近代の排水施設と推定される。遺物は、レンガ片、ガラス瓶が出土した。

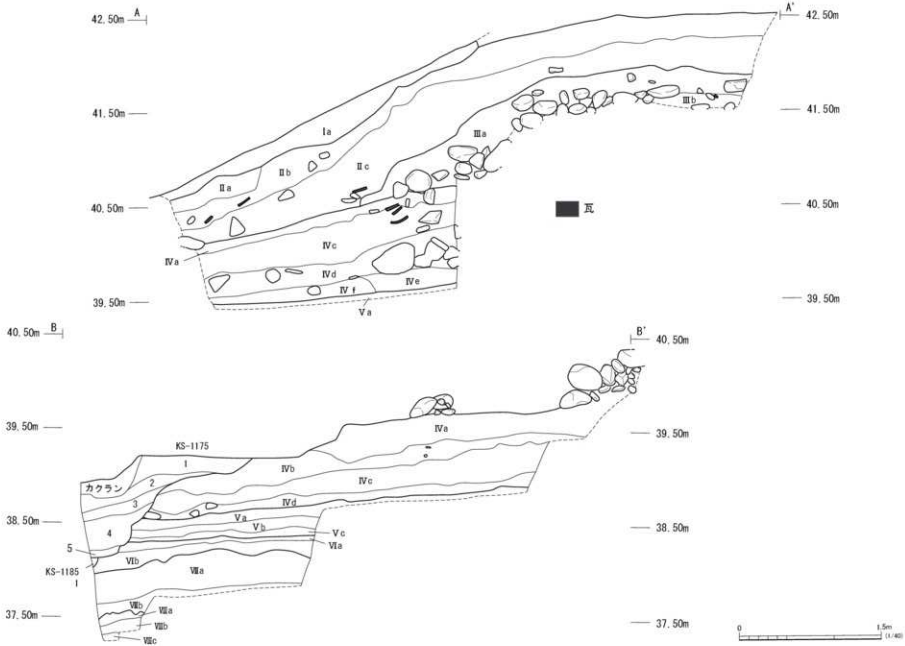
KS-1174 集石遺構　南東部のⅣ a 層上面で確認した。集石の範囲は、南北 1.6m、東西 2.0m で、集石の範囲は東西方向に延びる。径 30 ～ 60 ㎝の礫が主体で、自然礫と一部割石が混在している。径 5 ～ 20 ㎝の円礫も含み、石積が崩落したような状況が考えられる。位置は、第 32 次調査で確認された KS-1155 石垣の延長線上であり、KS-1155 石垣の続きが崩落した可能性が示唆される。集石は明治 30 年代以降の参拝道整備の際に出た造成土（Ⅲ層）に含まれていることから、この段階に廃絶したと考えられる。

KS-1187 石積遺構　中央部のⅣ a 層上面で確認した。石積の範囲は、南北 72 ㎝、東西 55 ㎝で、石積の範囲は南西方向に延び、軸線の方向は、N-18° -W である。石材は 40 ～ 60 ㎝の割石と自然礫が混在し、2 段積まれている状況で確認した。石材の状況が第 32 次調査（R1）で確認された KS-1155 石垣と KS-1174 集石と類似していることから、これらに関連した石積遺構の可能性が考えられる。

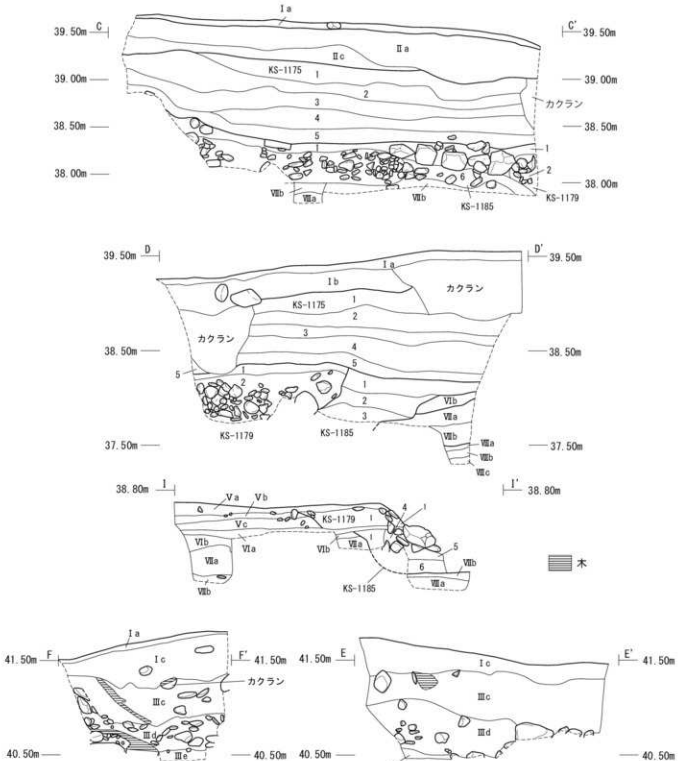
KS-1189 石列　北東部の表土直下で確認した。径 30 ～ 50 ㎝の自然礫を列状に配置しており、南東から北西方向に延びる。昭和 39 年（1964）に測量された「仙台城跡実測図」を見ると、前身の仙台市博物館が昭和 36 年（1961）に開館した際に整備された園路の区画と一致するため、石列はこの時期に園路に伴って敷設されたものと考えられる。



第 8 図　1 区近・現代遺構平面図


42.50m
A
A'
41.50m
40.50m
39.50m
Ia
IIa
IIb
IIc
IIIa
IIIb
瓦
IVa
IVb
IVc
IVd
IVe
IVf
Va
B
B'
KS-1175
カクラン
1
2
3
4
5
KS-1185
Vb
Vc
VIa
VIb
VIIa
VIIb
VIIc
VIIIa
VIIIb
VIIIc
0
1.5m
(1/40)

第9図　1区断面図 (1)



第10図　1区断面図(2)

第11図　KS-1180エレベーション図

第 4 表　1 区土層注記表

遺構・層位		土色		土質	土性	備考
		土色 No.	土色		しまり	
表土	Ⅰa	10YR2/3	黒褐色	シルト	なし	現表土
	Ⅰa	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	なし	木の根を多量に含む。
	Ⅰb	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	ややあり	径 1 ～ 2 ㎝の礫を少量含む　にぶい黄褐色（10YR7/3）粘土を含む
	Ⅰc	10YR4/4	褐色	シルト	なし	にぶい黄褐色（10YR7/3）粘土を含む
近現代堆積土・戦後	Ⅱa	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	なし	瓦片を含む　溶解ガラス片を多量に含む
	Ⅱb	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	あり	径 2 ～ 5 ㎝の礫を含む　焼土を含む　溶解ガラス片と焼けた瓦片を含む　凝灰岩ブロックを少量含む。
	Ⅱc	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	なし	径 2 ～ 5 ㎝の礫を含む　焼土を多量に含む
近現代堆積土・戦前	Ⅲa	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	径 5 ～ 30 ㎝の礫（KS-1174 の石材）を多量に含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅲb	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	炭化物を多く含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅲc	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	なし	凝灰岩ブロックと炭化物を含む
	Ⅲd	10YR4/6	にぶい黄褐色	シルト	ややあり	径 5 ～ 10 ㎝の礫を多量に含む
	Ⅲe	10YR3/3	暗褐色	シルト	ややあり	径 0.3 ～ 1 ㎝の礫を含む　炭化物粒を少量含む
明治期以降の整地土	Ⅳa	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト	強い	上面は硬化している　酸化鉄粒を含む　瓦片とガラス片を含む
	Ⅳb	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	あり	径 1 ～ 2 ㎝の礫を含む
	Ⅳc	10YR7/6	明黄褐色	砂質シルト	あり	径 3 ～ 5 ㎝の礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅳd	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	なし	径 3 ～ 5 ㎝の礫を含む
	Ⅳe	10YR7/6	明黄褐色	砂質シルト	なし	径 3 ～ 6 ㎝の礫を多量に含む　凝灰岩ブロックを含む
近世の整地土	Ⅴa	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	強い	上面は砂質で硬化している　凝灰岩（10YR7/8 黄橙色）が層状に含む　炭化物粒と植物遺存体を含む
	Ⅴb	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	強い	凝灰岩（5YR3/6 暗赤褐色）が層状に含む
	Ⅴc	10YR7/6	明黄褐色	砂質シルト	強い	径 2 ～ 5 ㎝の礫を含む　暗褐色（10YR3/3）粘土ブロックを含む
近世の整地土	Ⅵa	10YR4/6	褐色	粘質シルト	強い	上面は砂質で硬化している　炭化物粒を多量に含む
	Ⅵb	10YR2/4	暗褐色	粘質シルト	あり	凝灰岩ブロックを少量含む　酸化鉄を含む
路面下層の整地土	Ⅶa	10YR2/2	黒褐色	粘質土	あり	酸化鉄粒を微量に含む
	Ⅶb	10Y3/1	オリーブ黒	粘質土	あり	径 0.5 ～ 1 ㎝の礫を含む
自然堆積土	Ⅷa	10Y5/1	灰	砂質シルト	あり	オリーブ灰（10Y6/2）ブロックをまばらに含む
	Ⅷb	10Y4/1	灰	砂質シルト	あり	オリーブ灰（10Y6/2）ブロックをまばらに含む
	Ⅷc	10Y6/2	オリーブ灰	粘質土	あり	オリーブ灰（10Y6/3）ブロックをまばらに含む
KS-1175	1	10YR3/2	黒褐色	粘質シルト	あり	炭化物を多量に含む　溶解ガラスと瓦片を含む
	2	10YR	明黄褐色	砂質シルト	あり	黄橙（10YR8/8）ブロックを含む　ガラス片を含む
	3	5YR5/8	明赤褐色	砂質シルト	なし	酸化鉄粒を多量に含む
	4	10YR6/4	にぶい黄橙色	砂質シルト	なし	径 0.5 ～ 1 ㎝の礫を少量含む　酸化鉄粒を含む　ガラス片を含む
	5	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	なし	径 0.5 ～ 2 ㎝の礫を少量含む　酸化鉄粒を含む　ガラス片を含む
KS-1179	1	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	径 1 ～ 5 ㎝の礫を少量含む　酸化鉄粒を含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	径 10 ～ 20 ㎝の礫を多量に含む　酸化鉄粒を含む
KS-1180	1	10YR6/3	にぶい黄橙色	砂質シルト	なし	径 1 ～ 5 ㎝の礫を少量含む　酸化鉄粒を含む
KS-1185	1	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	あり	炭化物粒を微量に含む　酸化鉄粒を微量に含む
	2	10YR2/3	黒褐色	粘質シルト	あり	炭化物粒を微量に含む　酸化鉄粒を微量に含む
	3	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト	あり	凝灰岩ブロックを含む　酸化鉄粒を含む
	4	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土	あり	径 5 ～ 20 ㎝の礫を多量に含む　粒度がきめ細かい粘土
	5	10YR7/2	にぶい黄橙色	粘質シルト	あり	炭化物を微量に含む　酸化鉄粒を微量に含む
	6	10YR2/3	黒褐色	粘質シルト	あり	炭化物を微量に含む　酸化鉄粒を微量に含む

（2）登城路路面

近世期の登城路とされる路面は、Ⅷ層（地山層）から約 50 ㎝程度、水が浸透しにくい粘質土が主体のⅧ層が堆積しており、その上面に 2 面重なって路面を検出した。いずれも上面は、砂質土で硬化している。上層で確認した路面は、砂質土の下に薄く脆い凝灰岩を敷き詰める路盤を形成している。

第 2 路面（近世期上層の登城路跡路面）

南東部および北西部のⅤa 層上面で硬く締まった面（硬化面）を確認した。Ⅴ層にレンガ片、ガラス片の混入がないことから近世期と判断した。Ⅴa 層上面は硬い砂質土で、砂質土直下に凝灰岩を敷き詰めて構築している。付近の冀門跡礎石標高は 38.330m で、Ⅴa 層の標高は、調査区南東部隅で 38.460m、調査区北西部隅で 38.850m と冀門側から沢門側まで緩やかに傾斜を示している。地表面の露出時期は、直上のⅣe 層からレンガ片が出土してことと、またⅤa 層上面では 18 世紀代の大堀相馬産の陶器が多く、なかでも 19 世紀前葉～中葉の大堀相馬産土瓶（第 18 図 5）

の破片がまとまって出土していることから、18世紀から明治期のある時期までと考えられる。この地表面の位置は第32次調査で確認されたKS-1155石垣の外側にあたり、絵図等との比較から、巽門から清水門へ至る登城路の路面と考えられる。

第1路面（近世期下層の登城路跡路面）

第2路面下層のⅥa層上面で硬く締まった面（硬化面）を確認し第1路面とした。KS-1175近代溝跡に切られて第2路面が残っていない中央部から北西部で確認している。Ⅵa層上面は、第2路面同様に硬い砂質土である。Ⅵa層の標高は、調査区東部隅で38.300m、調査区北西部で38.410mと、Ⅴ層同様に緩やかな傾斜を示している。Ⅵa層上面からは菊丸瓦（第19図1）が出土している。第1路面の露出年代は、KS-1185石組溝跡の堆積土から出土した17世紀初頭～前葉の唐津産皿（第18図1）および18世紀代にKS-1185石組溝を壊して構築したKS-1179暗渠を伴う第2路面が再舗装される過程から、概ね17世紀前半から18世紀に属すると推定される。

(3) KS-1180石列（第2路面期）

南東部の南壁から中央部付近で確認した南東から北西方向に延びる石列である。Ⅴa層上面で確認されたが、掘り方が見られず直接埋め込まれていることから、Ⅴa層の整地と同時か整地以前に構築された可能性がある。抜き取られた箇所で断ち割りを行い、堆積土を1層確認した。石材下部で小礫がまとまった状況で確認し、根固めの可能性がある。一連の石材と考えられるものは5石あり、さらに石を抜き取った跡と考えられる痕跡が3箇所確認できる。石材は楕円形が主体で石材の大きさは、20cm～30cmである。いずれも平らな面を上面に向けており、高さはⅤa層の路面の傾斜に合わせ緩やかに傾斜を示している。石材の間隔はすべて15～20cmに収まる距離にあり、ほぼ等間隔で並んでいる。石列の方向は、N-85°-Eで東西軸を意識して敷設されている。この石列は、近世期の巽門から清水門に至る登城路の方向と一致し、路面上面で検出していることから、登城路に伴う遺構の可能性が高い。

(4) KS-1179暗渠（第2路面期）

北部のKS-1175溝跡底面で、径5～20cmの円礫の集中部を確認した。Ⅴb層上面から掘り込まれており、Ⅵ層の第2路面廃絶後に再度整地が行われ、Ⅴ層の第1路面整地段階で構築された可能性がある。規模は、上端幅1.64m以上、下端幅70cm以上、深さ61cm、確認長は4mで、方向はN-70°-Eである。円礫の集中部はさらに東西方向に延びるものと推定され、また調査中は雨天に関わらず水が流れていたことから、暗渠の可能性が考えられる。暗渠はⅤa層第2路面に覆われているため、登城路に伴う遺構の可能性が考えられる。

遺構の時期は、堆積土から出土した18世紀代の大堀相馬産碗およびⅤa層上面から出土した大堀相馬産土瓶の年代から、18世紀から19世紀前半に属すると推定される。

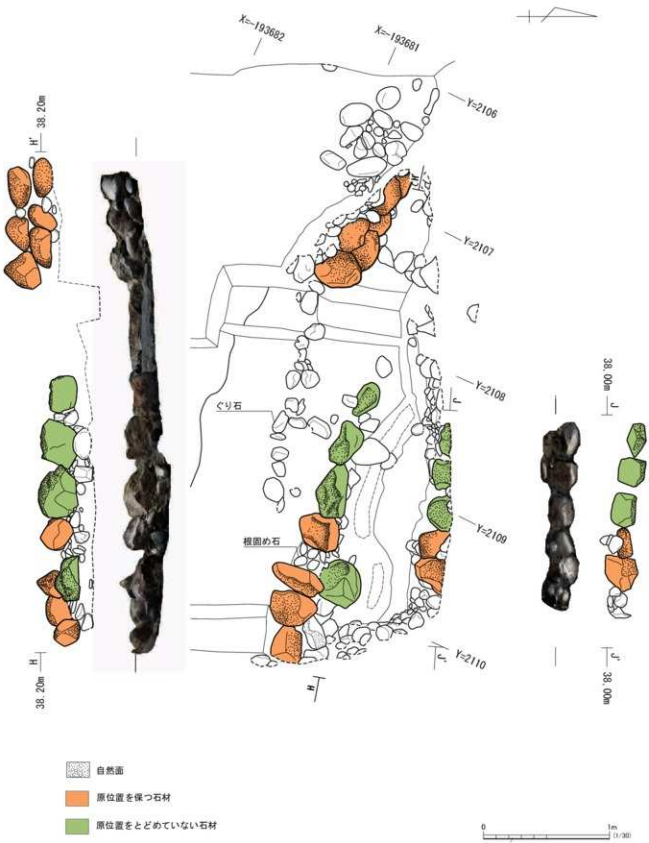
(5) KS-1185石組溝跡（第1路面期）

北部の東壁から東西に延びる石組の溝跡である。重複関係はKS-1179暗渠より古い。Ⅵb層上面から掘り込まれており、確認した堆積土は6層である。規模は、上端幅約70cm、下端幅49～55cm、深さ24cm、確認長は40.4mで、方向はN-70～78°-Eである。縁石は、自然礫の端部を打ち欠いた荒加工の石材が多く利用され、溝の内側に石材の割面が向くように配置されている。縁石背面は締まりの強い粘質土が用いられ、ぐり石も確認している。縁石基部は、根石も含め径10～15cm程度の根固め石をかませて積む構造である。縁石基部の状況から、検出した縁石の半数は、当時の原位置から動いていることを確認した。そのため原位置を保っているものと動いている石材は、色別し図化した（第12図）。

遺構の時期は、溝の最下層から出土した17世紀初頭～前葉の唐津産皿（第18図1）およびKS-1179暗渠の年代から概ね17世紀前半から18世紀に属すると推定される。この遺構は、Ⅵa層の第1路面整地段階で構築され、後に石組溝廃絶後、その直上に溝跡を利用し第2路面に伴うKS-1179暗渠が構築されたと想定される。

(6) KS-1190石敷（第2路面期）

北西部の北壁付近で確認した石敷で、径4～24cmの平らな円礫が敷き詰められている状況で確認した。Ⅴa層上面に構築されており、第2路面上の遺構である。石敷の範囲は、東西90cm、南北70cmで、北側の一部はKS-1175溝跡に切られている。西側はさらに調査区外に延びる。



第 12 図　KS-1185 石組溝

4. 2 区検出遺構

(1) 近現代の遺構

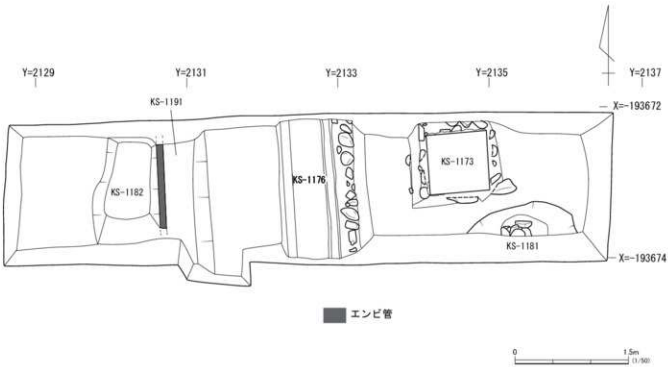
KS-1191 溝跡　西部で確認した現代のエンビ管を通すために入れられた溝状の掘方である。掘り込み面はⅠb 層直下のⅡa 層である。規模は上端幅 1. 66m、下端幅 40 cm、深さ 96 cmで、軸線の方向は、N-2° -Wである。延長方向は、さらに調査区外の南北方向に延びる。堆積土中からは、昭和後半の飲料缶やビニール片が含まれているため昭和 61 年（1986）に仙台市博物館改築の際に構築されたものと考えられる。

KS-1182 溝跡　西部のⅢa 層上面で確認した。上面の KS-1189 エンビ管掘方に切られている状況で確認した。規模は上端幅 1.3m 以上、下端幅 48 cm、深さ 1.28m で、軸線の方向は N-2° -W である。さらに調査区外の南北方向に延びる。また KS-1182 溝跡は KS-1178 石積遺構のすぐ西側にあたり、堆積土中からは石積に伴う石材が多く出土している状況から、この溝跡により KS-1178 石積遺構の一部が壊されたことが推測される。堆積土中からは、ガラス片およびレンガ片が出土しているため、近代の第二師団関連の遺構と考えられる。

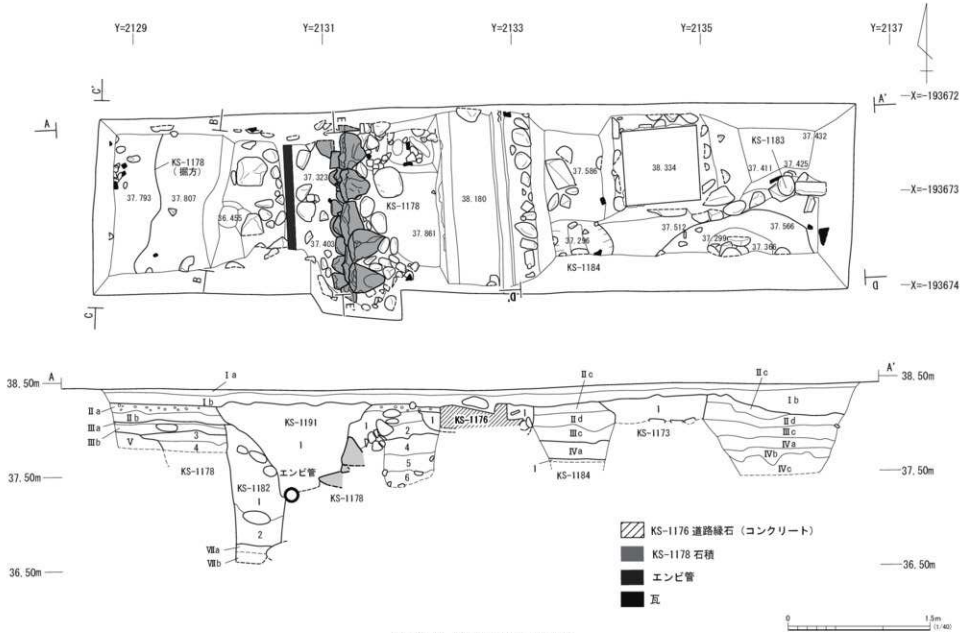
KS-1181 土坑　東部で確認した。断面観察によって土坑は 2 時期に渡って掘り込まれていることを確認した。最初はⅢc 層上面であり、次にⅡd 層上面から掘り込まれている。規模は東西 1.66m、南北 43 cm以上、深さ 54 cmで、形状はやや楕円形で、底部は焼土と径 10 ～ 25 cmの礫が入る。遺物は、堆積土から 17 世紀前半の唐津産碗（第 18 図 8）が出土している。

KS-1173（コンクリート基礎）　東部のⅡc 層上面で確認した。平面形状は正方形で、規模は 78 × 78 cmである。厚さ 30 cmあり、下部には型取りでコンクリートを流し込んだ際のバリが残る。上面は水平であり何らかの基礎と推測されるが詳細は不明である。また KS-1173 はⅡc 層から掘り込まれているのと、KS-1176 道路縁石と向きが平行していることから戦後の遺構と考えられる。

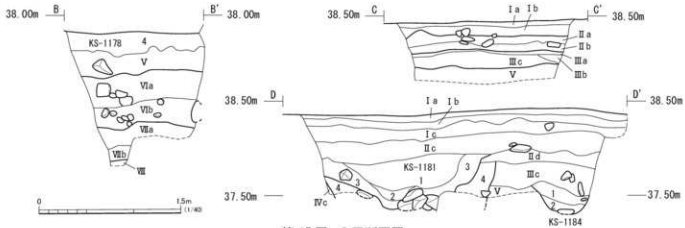
KS-1176 道路縁石（コンクリート縁石）　中央部のⅡ層上面で確認した。規模は幅 68 cmのＬ字型の道路縁石である。下部には型取りした際のバリが残る。縁石より西側Ⅱa 層は道路にあたり、小礫を敷き詰め硬く整地されている。昭和 39 年（1964）に測量された「仙台城跡実測図」を見ると、巽門跡から子門跡まで南北間の道路が確認されることから、現在の博物館になる昭和 61 年（1986）以前の旧博物館時代の道路縁石と考えられる。



第 13 図　2 区近・現代遺構平面図



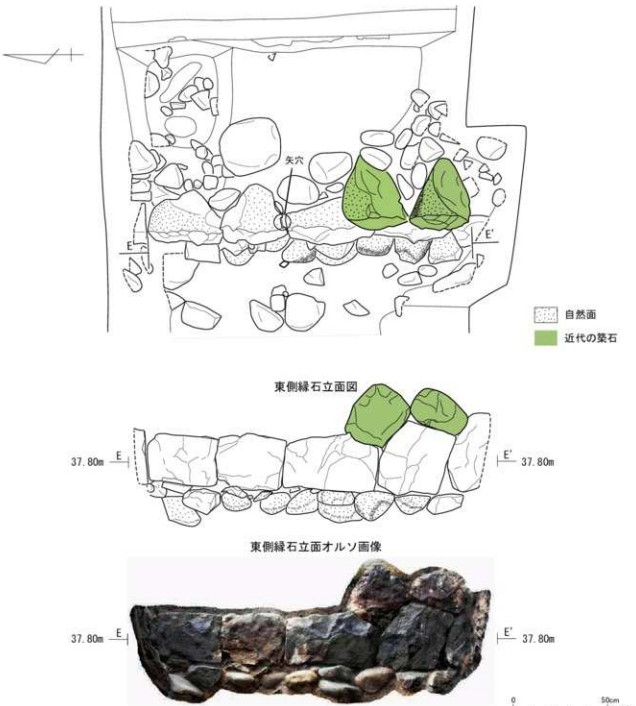
第 14 図　2 区平面図・断面図



第 15 図　2 区断面図

第 5 表　2 区土層注記表

遺構番号		土色		土質	土性	備考
		土色 No.	土色		しまり	
表土	Ⅰa	10YR2/3	黒褐色	シルト	なし	現表土　化繊ネットが敷設されている
	Ⅰb	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	径 1～2 ㎝の礫を多量含む
	Ⅰc	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	あり	径 1～10 ㎝の礫を含む
近現代堆積土・戦後	Ⅱa	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	強い	旧博物館時の道路面　径 1～2 ㎝の礫を多量に含む
	Ⅱb	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	あり	10YR5/8 黄褐色ブロックを斑状に含む　レンガ・瓦片を含む
	Ⅱc	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	あり	10YR5/6 黄褐色粘質土を含む
	Ⅱd	10YR5/3	灰黄褐色	シルト	あり	10YR5/6 黄褐色粘質土を含む　レンガ片を含む
近現代堆積土・戦前	Ⅲa	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	なし	径 0.5～1 ㎝の凝灰岩片を含む　酸化鉄粒を微量含む
	Ⅲb	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強い	5YR4/6 赤褐色ブロックを多量に含む　炭化物を少量含む
	Ⅲc	10YR6/2	灰黄褐色	シルト	ややあり	酸化鉄粒を含む　陶磁器を含む
近現代堆積土・戦前	Ⅳa	10YR6/2	にぶい黄橙	砂質シルト	ややあり	酸化鉄粒を含む　瓦片を含む　磁器片を含む
	Ⅳb	10YR4/4	褐色	シルト	ややあり	酸化鉄が層状に混ざる　酸化鉄を斑状に含む
	Ⅳc	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	10YR6/6 明黄褐色のブロックを斑状に含む　炭化物を微量含む　凝灰岩片を少量含む
近世の整地土	Ⅴ	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	あり	径 1～3 ㎝の凝灰岩粒を含む　径 2～5 ㎝の瓦片を多量含む
近世の整地土	Ⅵa	10YR6/6	明黄褐色	粘質シルト	ややあり	径 7～20 ㎝の円礫を含む　瓦片を多量含む
	Ⅵb	10YR7/8	黄橙色	粘質シルト	ややあり	径 1～5 ㎝の円礫を多量含む
近世の整地土	Ⅶa	10YR3/1	黒褐色	粘土	強い	径 0.5～1 ㎝の円礫を少量含む　瓦片が 1 点出土
	Ⅶb	10YR2/2	黒褐色	粘土	強い	酸化鉄を微量含む
自然堆積土	Ⅷ	10Y3/1	オリーブ黒	シルト質砂	あり	径 0.5～1 ㎝の円礫を含む
KS-1178	1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	ややあり	径 5～15 ㎝の円礫を多量含む　コンクリート片含む
	2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	径 2～3 ㎝の円礫を多量含む　レンガ片、磁器片を含む
	3	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト	ややあり	径 0.5～1 ㎝の円礫を少量含む　酸化鉄粒を少量含む　磁器片を多く含む
	4	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	径 0.5～2 ㎝の円礫を少量含む　凝灰岩片酸化鉄粒を少量含む　磁器片を多く含む
KS-1181	1	10YR7/6	明黄褐色	シルト質粘土	なし	10YR3/2 黄褐色粘質土ブロックを含む
	2	10YR1.7/1	黒	シルト質粘土	なし	炭化物を多量含む　酸化鉄粒を微量含む
	3	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	ややあり	炭化物を少量含む　酸化鉄粒を微量含む
	4	10YR5/8	黄褐色	粘土	強い	径 1～2 ㎝の礫を少量含む　10YR3/2 黄褐色粘質土ブロックを含む
KS-1182	1	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	あり	径 7～20 ㎝の円礫を含む　酸化鉄粒を含む　レンガ片を含む
KS-1189	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	あり	径 10～30 ㎝の円礫と角礫を多量含む　酸化鉄粒を含む　レンガ片を含む
KS-1184	1	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	あり	径 5～15 ㎝の礫を含む　瓦片を多量含む
	2	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	あり	径 5～16 ㎝の礫を含む　瓦片を多量含む



第 16 図　KS-1178 石組側溝

(2) KS-1178 石組側溝跡

西部の南壁から南北に延びる石組側溝である。石組側溝の東側縁石と側溝底面、西側は掘り方のみ検出した。西側の縁石は、近代の KS-1182 溝跡により壊されている。石組側溝の掘り方は、V 層から掘り込まれており、確認した長さは 1.9m で、軸線の方向は、N-5° -W である。石材は横幅が長く正面 49 × 30 cm で、控えは 30 cm程度である。一部南側で 2 段積が見られ谷積みを意識している。加工はハツリ主体で、1 石に矢穴が見られ、縁石の直下は径 15 ～ 20 cmの円礫を主体として根石に据えている。側溝底面には平坦な川原石を敷き詰めた形跡が見られ、壊された際に僅かに残ったものと考えられる。

また、2 段目の石材は 1 段目の石材とは形状と加工の状況が異なる。形状は小ぶりで正面が四角形であり、近代の間知石に近い。2 段目の縁石背後からは、レンガ片およびコンクリート片が出土していることから、近代においても

石積が利用されていたものと想定される。

遺物は、西側掘り方から17世紀中頃の肥前産染付碗（図版6-12）と東側縁石背後から17世紀前半の岸窯産すり鉢（第18図6）が出土している。

(3) KS-1183 石列

東部の東壁から南東方向に延びる石列である。V層上面で検出されたが、掘り方が見られずV層に直接埋め込まれていることから、V層の整地と同時かそれ以前に構築された可能性がある。一連の石列と考えられるものは5石あり、石材の形状は長方形から楕円形と様々である。石列の方向は、N-70°-Eであり北東方向にさらに延びる。本遺構の時期は、V層で19世紀前半の肥前産つる首瓶が出土していることから19世紀以降と考えられる。

(4) KS-1184 溝跡

東部の南壁から南北方向に延びる。掘り込み面はV層上面とみられ、規模は上端幅62㎝、下端幅14㎝、深さ32㎝で、確認した長さは1.3mである。軸線の方向は、N-5°-Wであり、KS-1178石組側溝と平行し、さらに調査区外に延びる。堆積土は2層確認した。遺物は、二次加工が見られる17世紀代の肥前産碗（第18図10）が出土している。本遺構の時期は、V層で19世紀前半の肥前産つる首瓶が出土していることから19世紀以降と考えられる。

5. 出土遺物

ここでは主に遺構外から出土した遺物について記述する。具体的な遺物の出土点数については第6表に示した。

(1) 磁器

第17図1は、肥前産の小型品の白磁小坏で、主に紅などを入れた化粧具などが想定される。第17図4、5は、源氏文が施された瀬戸美濃産の端反碗で、共に19世紀中ごろのものである。第17図7は、波佐見産の筒茶碗で、茶道具としての用途が想定される。年代は17世紀後半である。第17図8、10、11は、肥前産の皿で、特に11は長皿で、蛸唐草文が施される。年代は18世紀代である。

(2) 陶器

第18図2は、19世紀前葉～中葉の大堀相馬産の豆甕で、第18図3は、18世紀後半代の大堀相馬産の小坏で、図版7-5は、17世紀初頃の備前産大甕である。いずれも主に造酒屋敷跡で使用された陶器である。備前産大甕は、酒造りに使われた甕で、その大甕片は1区のⅠ層～Ⅲ層出土資料を含めると合計8点出土している。これらの陶器類は、明治30年代の参拝道整備で造酒屋敷地が掘削された際に、混入したものと考えられる。第18図9は、岸窯産と思われる蓋であり、外面に鉄釉が施釉される。裏面は無釉でありロクロの糸切り痕がある。茶道具の水注に付随する蓋と想定される。年代は17世紀代と思われる。

(3) 土師質・瓦質土器

土師質土器は合計22点、瓦質土器は合計2点出土しており、その内1区のⅥ層から土師質の皿が1点出土している。

(4) 瓦

総計1138点出土し、このうち丸瓦が289点、平瓦が726点で併せて全体の89%を占める。区毎の出土傾向をみると、1区ではⅠ、Ⅱ層から出土している。KS-1179暗渠からも比較的多く出土しており、1区全体の19%を占める。2区ではⅠ～Ⅲ層から出土し、近世面であるⅤ層からは95点出土し、2区全体の25%を占める。丸瓦、平瓦を中心に軒丸瓦、軒平瓦、軒桟瓦、伏間瓦、熨斗瓦、輪違い、棟込菊丸瓦、面戸瓦、塀瓦、鬼瓦が出土している。その内30点図示している。

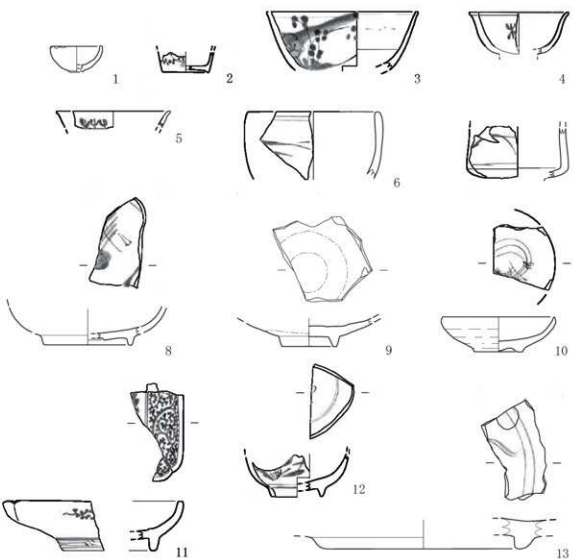
第19図1は棟込の菊丸瓦で、文様は菊花文である。第1路面と考えられるⅥa層上面から出土した瓦である。第19図2～4は軒丸瓦で、文様は九曜文、三巴文である。第19図6～11は軒平瓦で、文様は中心飾りに桔梗文が主体で、5点出土している。第19図12～14と第20図1～3は丸瓦で、凸面は縦ケズリ、凹面に布目痕とコビキB痕がみられるのが主体である。第20図5は用途不明の平瓦であり、釘穴周辺は、直径5㎝程度の円形の痕跡が見られる。飾り瓦の一種とも考えられる。第20図7と第21図1は塀に伴う瓦で、大型の駒付平板と桟付平板が出土している。第21図7は鬼瓦の髭にあたる部位と考えられる。第21図8は飾り瓦で、鯱瓦等に伴う差し込みと考えられる。

(5) 金属製品・ガラス製品・レンガ

金属製品では、鉄釘が2区より出土し、図版8-20は、第二師団関連の弾丸である。ガラス製品では、1区よりⅡ層の焼土を含む層から、溶解した第二師団関連のビール瓶などが数多く出土している。第21図15は、「大日本麦酒株式会社」の陽刻である。図版8-22は、ミッションコーラの飲料瓶で、瓶の形態から1950～60年間に国内製造されたものと考えられる。第21図10、11、12は、第二師団建物関連のレンガで、「ワ」、「六」、「へ五」の印字がみられる。

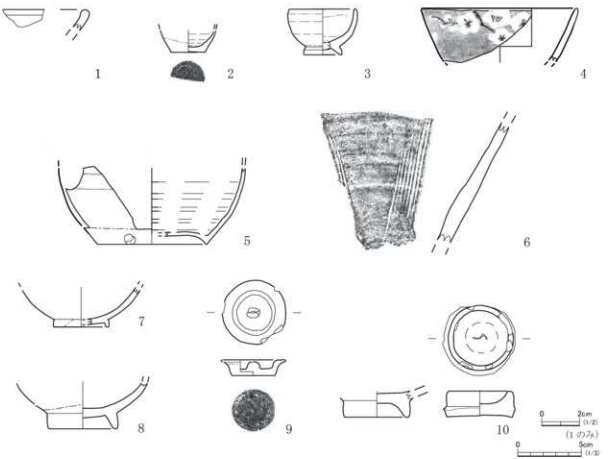
第6表　第35次調査出土遺物集計表

区	層位・遺構	磁器	陶器	土師質土器	土製品	瓦質土器	瓦	金属製品	石製品	木製品	ガラス製品	レンガ	動植物遺体	その他	総計
1	Ⅰ	23	26	4			180				8	1	1	1	244
	Ⅱ	26	18	3		1	224	1			14	5			292
	Ⅲ	12	8				46	1							67
	Ⅳ	3	7				47								57
	Ⅴa上面	1	5				3								9
	Ⅴ			1			32								33
	Ⅵa上面			1			4								5
	Ⅵ						4								4
	KS-1175	1	1	1			43				3	1			50
	KS-1179		2				142				1				145
	KS-1185						4			1					5
	その他	10	2				33	1			1				47
	小計	76	69	10	0	1	762	3	0	1	27	7	1	1	958
2	Ⅰ	37	16	5			42				3			1	104
	Ⅱ	11	12	1			13				1				38
	Ⅲ	18	30	6			141	1	1					1	198
	Ⅳ	12	4				9								25
	Ⅴ	17	19				95				1				132
	Ⅵ		1												1
	Ⅶ						1								1
	KS-1178	3	2				12	1							18
	KS-1181	2	5			1	5	1							14
	KS-1182	3	2				39				2				46
	KS-1184	3					19								22
	その他		1												1
	小計	106	92	12	0	1	376	3	1	0	7	0	0	2	600
総計		182	161	22	0	2	1138	6	1	1	34	7	1	3	1558



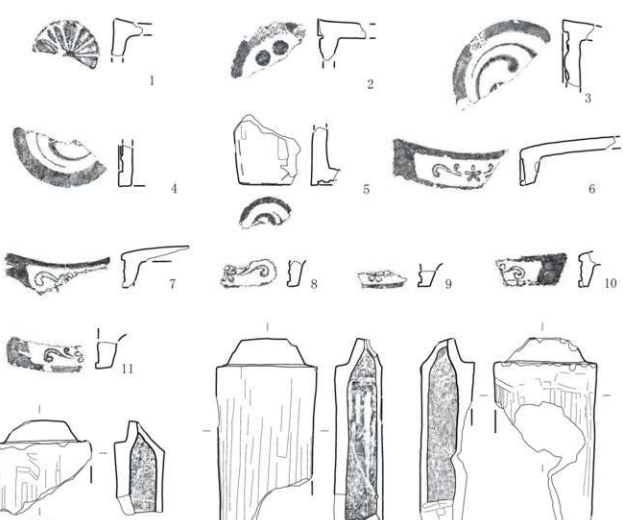
図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径（mm）	底径（mm）	器高（mm）	釉薬・文様等	備考	写真図版
1	183	磁器	白磁	2 区東部 Ⅱ d	肥前	紅小坏	17c	(28)	(8)	(14)		内面型押しか	6-7
2	28	磁器	染付	1 区中央部 Ⅲ a	肥前	猪口	18c	(-)	(38)	(16)			6-8
3	155	磁器	染付	1 区北東部 Ⅰ a	波佐見	碗	18c 後半～19c 前半	(120)	(-)	(46)	草花文		6-1
4	19	磁器	染付	1 区南東部 Ⅲ a 下層	瀬戸美濃	端反碗	19c 中～	(78)	(-)	(33)	源氏文	口銹	6-5
5	29	磁器	染付	1 区中央部 Ⅲ a	瀬戸美濃	端反碗	19c 前～中	(90)	(-)	(13)	源氏文		6-2
6	96	磁器	陶胎染付	1 区中央部 Ⅲ a	波佐見	碗	17c 後半～18c 前半	(110)	(-)	(53)			6-14
7	313	磁器	陶胎染付	2 区 Ⅰ	波佐見	筒茶碗	17c 後半	(-)	(-)	(40)			6-15
8	20	磁器	染付	1 区南部 Ⅲ d	肥前	皿	18c 後半	(-)	(70)	(30)	山水文か？船か？	蛇の目高台	6-3
9	1	磁器	染付	1 区南部 Ⅲ d	波佐見	皿	17c 後半～18c 前半	(-)	(44)	(22)		見込み蛇の目釉剥ぎ 畳かち底部にかけて露胎	6-11
10	352	磁器	染付	2 区 Ⅰ（南北サブトレ）	肥前	小皿	17c 中頃	(90)	(38)	28		細筆書きが特徴 兜巾がある 畳付き広い	6-16
11	8	磁器	染付	1 区南東部 Ⅰ a	肥前	長皿	18c	(-)	(-)	39	内面櫛描草文、外面つる草文		6-6
12	33	磁器	染付	1 区 表採	瀬戸美濃	端反碗	19c 前葉～中葉	(-)	(40)	(34)	草花文、見込みにも文様		6-9
13	325	磁器	青磁	2 区西部 KS-1182-1	波佐見	皿	17c	(-)	(160)	(24)		畳付きにも施釉されているため三脚が付属か？見込みに文様あり	6-10
写	84	磁器	染付	2 区西部 KS-1178-3	肥前	碗	17c 中頃	(-)	(-)	(50)	一重網目文		6-12
写	200	磁器	染付	1 区 表採	肥前	瓶類	17c 後半～18c 初頭	(-)	(-)	(40)			6-4
写	286	磁器	染付	2 区西部 V a	肥前	瓶類	19c 前半	(-)	(-)	(18)		つる首瓶 小型品	6-13

第 17 図 第 35 次調査（登城路跡） 出土遺物 (1)



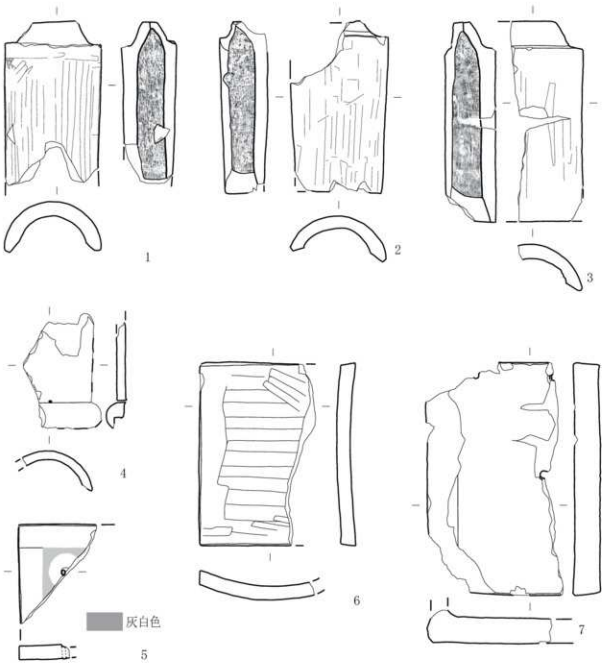
図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	釉薬・文様等	備考	写真図版
1	15	陶器		1区北東部 KS-1185-5	唐津	皿	17c 初頃～前葉	(-)	(-)	(10)	灰釉		7-2
2	138	陶器		1区南東部 Ⅳa上面	大堀相馬	豆壺	19c 前葉～中葉	(-)	(28)	(17)	鉄釉		6-20
3	126	陶器		1区南東部 Ⅰa	大堀相馬	小坏	18c 後半～	(54)	(30)	36	白濁釉		7-1
4	211	陶器		2区東部 Ⅲc	瀬戸	碗	19c 中頃	(124)	(-)	(42)	鳥獣文、白の化粧土をかけた後、透明釉をかけた		6-25
5	201	陶器		1区南東部 Ⅴa上面	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(-)	(88)	(60)		鉄絵 欠片 6 点	6-27
6	83	陶器		2区東部 KS-1178-4	岸	すり鉢	17c 前半	(-)	(-)	(95)	鉄釉		6-21
7	197	陶器		1区 表採	大堀相馬	碗	18c	(-)	(44)	(31)	灰釉		6-19
8	295	陶器		2区東部 KS-1181-1	唐津	茶碗	17c 前半	(-)	54	(36)	鉄釉	高台内兜巾あり	6-18
9	410	陶器		1区南東部 Ⅱb	岸？	水注の蓋？	17c ？	50	34	13	鉄釉	糸切り底	7-4
10	196	陶器		2区東部 KS-1184-1	肥前	碗	17c	(-)	52	(21)	灰釉	高台周縁を打ち欠いた二次加工がみられる蓋か？	6-26
写	68	陶器		1区南東部 Ⅱb	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(-)	(-)	(65)		鉄絵 No.201 と同個体	6-29
写	70	陶器		1区南東部 Ⅴa上面	大堀相馬	碗		(80)	(-)	(38)	灰釉に粘釉かけ流し		6-17
写	71	陶器		1区南東部 Ⅴa上面	大堀相馬	瓶類		(-)	(-)	(27)	灰釉		6-24
写	99	陶器		1区中央部 Ⅲa	大堀相馬	鉢類	19c ～ 20c	(-)	(60)	(10)			7-3
写	159	陶器		1区中央部 Ⅰa	備前	甕	17c 初頃？	(-)	(-)	(126)			7-5
写	203	陶器		1区南東部 Ⅴa上面	大堀相馬	土瓶	19c 前葉～中葉	(-)	(-)	(38)		鉄絵 No.201 と同個体	6-28
写	204	陶器		2区西部 Ⅵa	織部	皿	17c 前半	(-)	(-)	(18)			6-23
写	208	陶器		2区 Ⅰ				長 (102)	()	()		型押し	6-22

第 18 図　第 35 次調査（登城路跡）　出土遺物（2）



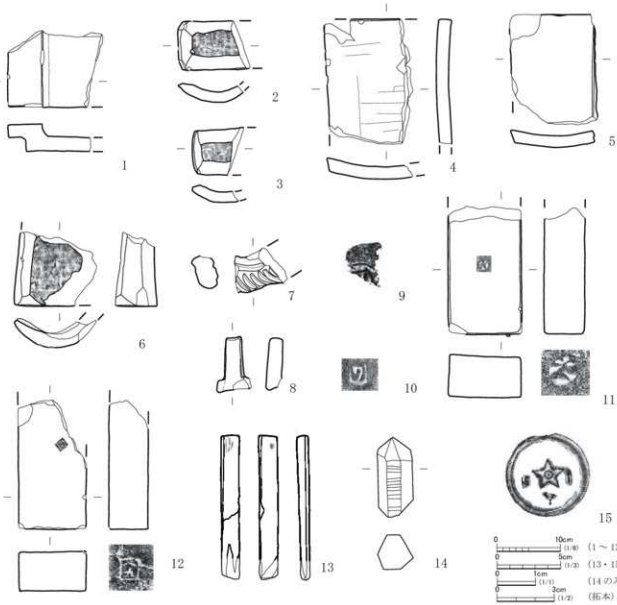
図中番号	遺物番号	種別	種類	文様	遺構・層位	法量 (mm)	重さ (g)	備考	写真図版
1	568	瓦	軒込瓦	菊花文	1 区南東部　VI a 上面	瓦当径 (103)　後幅 (-)　長さ (48)　厚さ (・)　瓦当厚さ (-)	240		7-6
2	521	瓦	軒丸瓦	九曜文	1 区中央部　I a	瓦当径 (65)　内区径 (39)　周縁幅 26　周縁深さ 7　瓦当厚さ (・)	510		7-7
3	470	瓦	軒丸瓦	三巴文	1 区北東部　KS-1179-1	瓦当径 (174)　内区径 (130)　周縁幅 19　周縁深さ 8　瓦当厚さ (・)	450	巴（左巻き）	7-8
4	435	瓦	軒丸瓦	三巴文	2 区東部　KS-1184-1	瓦当径 (156)　内区径 (114)　周縁幅 24　周縁深さ 6　瓦当厚さ 20	240	巴（左巻き）	7-9
5	531	瓦	軒桟瓦	三巴文・?	1 区中央部　III a	前幅 (80)　後幅 (-)　長さ (110)　平部厚さ 22 瓦当径 (80)　内区径 (65)　周縁幅 12　周縁深さ 5　瓦当厚さ (・)	340		7-10
6	437	瓦	軒平瓦	桔梗文（細）・唐草	2 区東部　KS-1184-1	瓦当幅 (175)　瓦当高さ (85)　瓦当厚さ (14)　内区幅 (125)　内区高さ 32　周縁深さ 4 ～ 7　長さ (149)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	1870		7-11
7	423	瓦	軒平瓦	桔梗文・唐草	2 区　II a	瓦当幅 (156)　瓦当高さ (79)　瓦当厚さ (20)　内区幅 (125)　内区高さ 33　周縁深さ 6.5　長さ (107)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	100	No. 536, 592 と接合	7-12
8	551	瓦	軒平瓦	桔梗文・唐草	2 区東部　III c	瓦当幅 (88)　瓦当高さ (・)　瓦当厚さ 18　内区幅 (85)　内区高さ (23)　周縁深さ 4　長さ (29)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	80		7-13
9	615	瓦	軒平瓦	桔梗文・唐草	1 区南東部　II b	瓦当幅 (96)　瓦当高さ (28)　瓦当厚さ 20　内区幅 (78)　内区高さ (27)　周縁深さ 4　長さ (29)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	50		7-14
10	582	瓦	軒平瓦	?・唐草	1 区北東部　I a	瓦当幅 (120)　瓦当高さ (60)　瓦当厚さ (16)　内区幅 (71)　内区高さ 30　周縁深さ 5　長さ (40)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	180		7-15
11	576	瓦	軒平瓦	桔梗文・唐草	1 区北東部　KS-1179	瓦当幅 (120)　瓦当高さ (64)　瓦当厚さ 27　内区幅 (81)　内区高さ (21)　周縁深さ 8　長さ (21)　後幅 (-)　弧深 (-)　厚さ (-)	160	No. 668 と接合	7-16
12	477	瓦	丸瓦		1 区南東部　II c	前幅 (・)　後幅 155　長さ (147)　高さ 75　厚さ 24 玉縁先幅 (60)　玉縁長さ 31	680	3 辺	7-17
13	534	瓦	丸瓦		2 区東部　III c	前幅 (45)　後幅 157　長さ 317　高さ 72　厚さ 19　玉縁先幅 (71) 玉縁長さ 43	1740	3 辺	7-18
14	475	瓦	丸瓦		2 区東部　III c	前幅 (50)　後幅 163　長さ 310　高さ 79　厚さ 22　玉縁先幅 (48) 玉縁長さ 36	1370	3 点接合	7-19

第 19 図　第 35 次調査（登城路跡）　出土遺物 (3)



図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	法量 (mm)	重さ (g)	備考	写真図版
1	672	瓦	丸瓦	2 区東部 Ⅲ e	前幅 (-) 後幅 153 長さ (256) 厚さ 22 玉縁先幅 (68) 玉縁長さ 38 高さ 79	1700	No. 538, 564, 427 と接合	7-20
2	420	瓦	丸瓦	2 区東部 Ⅲ e	前幅 (140) 後幅 (152) 長さ (243) 高さ 72 厚さ 19 玉縁先幅 (25) 玉縁長さ 22	1440	3 点接合	7-21
3	673	瓦	丸瓦	2 区東部 Ⅳ a	前幅 (81) 後幅 (114) 長さ 317 高さ 74 厚さ 22 玉縁先幅 (74) 玉縁長さ 40	1240	2 点接合	8-1
4	540	瓦	丸瓦	1 区南東部 Ⅱ b	前幅 (97) 後幅 (71) 長さ (168) 高さ 63 厚さ 14	470	紐丸	8-2
5	669	瓦	平瓦	2 区東部 Ⅲ e	長さ (158) 後幅 (125) 厚さ 22 前幅 (-) 高さ (-)	400		8-4
6	502	瓦	平瓦	2 区東部 Ⅲ c	長さ 290 前幅 (145) 後幅 (165) 長さ 290 高さ 47 厚さ 22	1760	3 辺	8-3
7	601	瓦	瓢瓦 (駒付平板)	1 区南東部 Ⅳ a	全体最大幅 (198) 全体全長 (370) 平板部厚さ (40) 駒部 (-)	4420	3 点接合	8-5

第 20 図　第 35 次調査（登城路跡）　出土遺物 (4)



図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	法量（mm）	重さ（g）	備考	写真図版
1	460	瓦	丸瓦（桟付平板）	1 区南東部 Ⅰa	長さ（120） 幅（148） 厚さ 22 高さ 43 桟長さ（120） 桟幅 55 桟下幅 28 桟下厚さ 22	640		8-10
2	459	瓦	面戸瓦	1 区南西部 Ⅰa	長さ 76 幅（112） 厚さ 16 高さ 29	180		8-8
3	602	瓦	面戸瓦	1 区南東部 Ⅳa	長さ 73 幅（80.5） 厚さ 16 高さ 27	140		8-9
4	508	瓦	熨斗瓦	2 区東部 Ⅲc	長さ（196） 幅（118） 厚さ 20 高さ 33 割線の深さ（-）	600	2 点接合	8-7
5	565	瓦	熨斗瓦	1 区南東部 Ⅱb	長さ（172） 幅 135 厚さ 18 高さ 29 割線の深さ 5	610		8-6
6	500	瓦	輪違い	1 区中央部 Ⅱb	長さ（115） 前幅（96） 後幅（-） 高さ 50 厚さ 20	400		8-11
7	535	瓦	鬼瓦？	2 区東部 Ⅲc	幅（60） 長さ（80） 厚さ 33	130		8-13
8	620	瓦	飾瓦（不明）	1 区北東部 KS-1179-2	長さ（82） 幅（54） 厚さ 23	100		8-12
9	514	瓦	平瓦	1 区中央部 Ⅰa	全長（76）	80	刻印あり	8-14
10	556	レンガ		1 区南東部 Ⅰa	長さ（86.5） 幅（80） 厚さ 60	322	刻印「ワ」	8-15
11	671	レンガ		1 区 Ⅱb	幅 114 長さ 199 厚さ 63.5	2000	刻印「穴」釘あり	8-17
12	659	レンガ		1 区 Ⅱc	長さ（204） 幅 108 厚さ 63	1600	刻印「へ五」の上 示無い字	8-16
13	665	木製品	木簡	1 区北東部 KS-1185-4	長さ（113） 幅（14） 厚さ（9）	10.95		8-18
14	412	石製品	水晶	2 区西部 Ⅲc	長さ 21 幅 9 厚さ 9	2.43		8-21
15	663	ガラス製品	瓶	1 区北東部 Ⅱb	器高（56） 底径 75	120	瓶底陽刻「☆Y」	8-19
写	164	ガラス製品	瓶	1 区南西部 Ⅱb 上面	器高 210 底径 54	370		8-22
写	416	金属製品	銃弾	1 区 表採	全長 27.5 上部径 8 下部径 11	24.65		8-20

第 21 図　第 35 次調査（登城路跡）　出土遺物 (5)

6. 考察

第 35 次調査の成果に関し、登城路の遺構について若干の考察を行う。今回検出された登城路の路面を含めた遺構群と、これまで検出した巽門跡から清水門跡までの登城路に関連した遺構（第 23 図）を整理し、今後の登城路調査に向けた課題について記述する。

(1) 第 35 次調査検出遺構の変遷について

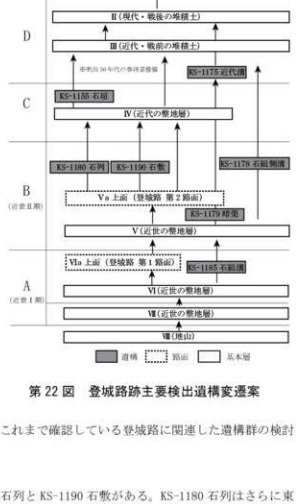
今回検出された遺構群における検出面の違いや重複関係を基に、登城路の路面と遺構の変遷案を作成した（第 22 図）。4 期に区分した。A・B 期は近世における新旧の登城路路面に係る時期区分であり、C 期からは近代で、D 期は明治 30 年代の参拝道整備で大きく登城路の形態が変更された以降の時期区分である。ここでは主に、A・B 期の概要と周辺地区との考察を記述する。

A（近世Ⅰ期）

第 1 路面構築から廃絶までを A 期（近世Ⅰ期）とした。時期は KS-1185 石組溝が機能していた 17 世紀前半～ 18 世紀代と考えられる。廃絶期は 18 世紀代と想定され、この時期に V 層の整地（第 2 路面舗装）および KS-1179 暗渠が構築されている。第 1 路面より下層は、地山層まで路面は確認できないため、第 1 路面が築城期もしくは近い時期の路面である可能性が考えられる。

B（近世Ⅱ期）

第 2 路面構築から廃絶までを B 期（近世Ⅱ期）とした。時期は、18 世紀代から明治期までと考えられ、第 2 路面は、廃城後も明治 30 年代に始まる参拝道整備までは機能していたことが想定される。今回、巽門付近で確認した第 1 路面に続く箇所としては、第 30 次調査（H30）の清水門石垣付近で確認した Ⅸa 層上面の硬化面があたると考えられる。第 30 次調査では、直上から板ガラスが出土していることから、近世から近代までの時期が想定されており、第 1 路面と時期的にも概ね対応する。2 つの確認地点の水平距離は東西 40m、高低差は 3m を測る。今年度確認した地点（巽門付近）から第 30 次調査の確認地点（清水門石垣下）までの登城路の傾斜角は約 7.5%であることがわかる。



第 22 図　登城路跡主要検出遺構変遷案

(2) 巽門跡から清水門跡周辺の関連遺構について

巽門跡から清水門跡周辺の遺構配置図を作成し（第 23 図）、これまで確認している登城路に関連した遺構群の検討と今後の課題を記す。

登城路の路面上の遺構

Ⅴa 層上面に形成された遺構には、踏み石状に並ぶ KS-1180 石列と KS-1190 石敷がある。KS-1180 石列はさらに東西方向に延びることが想定される。位置関係や絵図等の比較から、造酒屋敷の入り口付近であり、それらの遺構に伴う可能性も考えられる。今後、造酒屋敷の入り口および境界を明らかにするため、さらに造酒屋敷側にあたる西側への遺構の延びを確認することが課題としてあげられる。

巽門西側石垣

門から、北西方向に屈曲する石垣の延長として、第 32 次調査で KS-1155 石垣が確認されているが、今回の調査により、石垣構築面が近代整地層のⅣ層上面であることが明らかになった。また延長部分は明治 30 年代の参拝道整備により失われていることを確認した。しかし KS-1155 石垣には、巽門西側石垣でみられる比較的大型の石材も一部で用いら

れており、さらに近世期の登城路の向きと概ね合うことから、近代において近世期の石垣を踏襲して積まれていることも想定される。いずれにしても造酒屋敷との明確な境界を明らかにするため、石垣が残る箇所で根石を確認することと、KS-1155石垣を一部解体し、背面とその周辺を調査することが今後の課題である。

登城路の排水（暗渠・石組側溝）

清水門跡周辺では、石組の井戸が存在し、清水門石垣北面の基礎部で東西方向に延びる暗渠が見つかっていることから（仙台市教育委員会2006）、湧水が豊富で旧地形は沢であったと考えられる。今回の調査を含め、排水に係る暗渠、石組側溝は各調査で確認されており、登城路における清水門側からの排水が重要視されていたことが想定される。

暗渠としては、第1路面下層のV層中において東西方向に延びるKS-1179を確認しており、第30次調査（H30）でもⅨa層下層でKS-1134を確認している。また第30次調査（H30）の清水門石垣東側で南北に延びるKS-1137石組溝跡が確認されており、今回の調査でも巽門跡から子門へ延びる南北に延びるKS-1178石組側溝跡を確認している。KS-1178石組側溝跡は、形状と構造が第13次調査（H17）で確認された巽門跡から長沼へ続く石組側溝と類似することから、その延長と推測される。

以上の遺構から、当該地の近世期における登城路路面は、豊富な湧水を処理する暗渠、石組側溝は重要な構成要素であり、それらの排水経路は、基本的に長沼へ抜ける疏路であることが推測される。

これまで確認した暗渠は、清水門側から長沼へ抜ける一連のものとも考えられるが、暗渠や石組側溝も現状では、部分的な検出にとどまり、長沼に至る具体的な排水経路は明らかとなっていないことが課題である。これらを明らかにすることで、登城路の形状（道路幅）と路面の排水方法が明確になる。整備に繋がる登城路調査として、今後それらを重点的に調査する必要がある。

A（近世Ⅰ期）の遺構

第1路面に伴う遺構としてKS-1185石組溝跡を確認した。第30次調査（H30）においても路面と想定されるⅨa層より古い整地層の上面から、2列の石組を配したKS-687石組遺構が確認されている。今回のKS-1185は、KS-687の延長線上にあたり、方向もほぼ一致することから、関連した遺構の可能性がある。しかしKS-687は石組内水性堆積土が確認できず、遺構の機能面は不明である。今後、登城路の形状や変遷の解明に係る遺構としてその実態を明らかにする必要がある。

7. まとめ

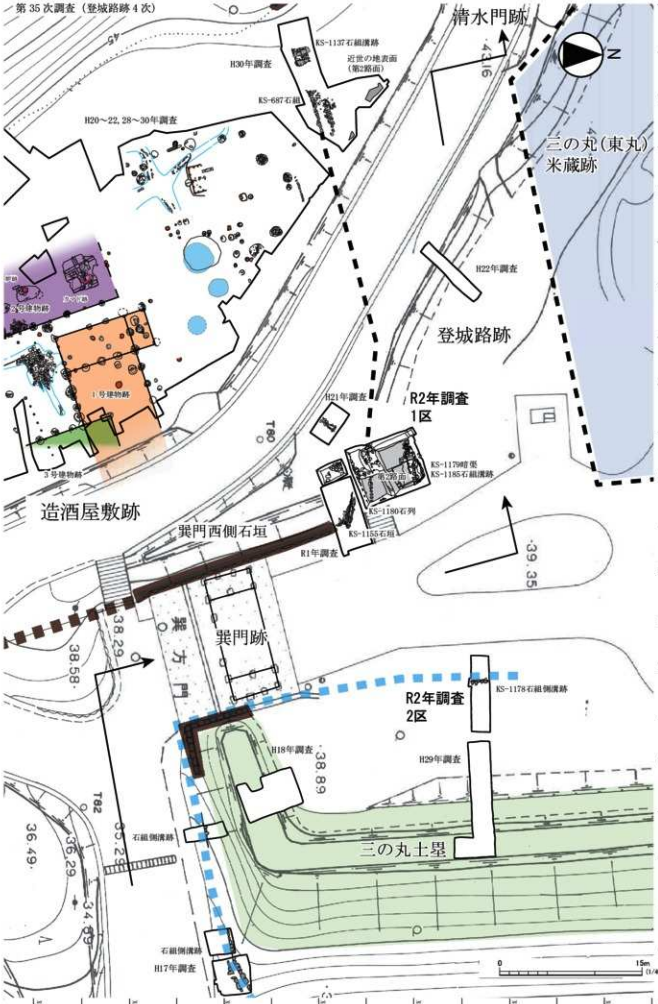
1区では、巽門跡から清水門跡に至る登城路の路面を2面確認した。第2路面（Va層上面）は、18世紀代から明治期と考えられ、地表面からは踏み石状に並ぶKS-1180石列とKS-1190石敷を検出している。また登城路の路面下の排水処理に関わる遺構としてKS-1179暗渠を確認した。さらに下層で第1路面（Ⅵa層上面）を確認し、17世紀前半から18世紀代が想定されるKS-1185石組溝跡を確認した。調査区の路面の変遷として、第1路面段階では石組溝が開口していた時期があり、廃絶後、その場所にKS-1179暗渠が構築され、第2路面が舗装される過程が見れた。

2区では、巽門跡から子門跡に至るKS-1178石組側溝跡を確認した。これにより登城路の東辺区画を明らかにすることができ、これまでの調査で確認されている長沼に至る排水系統と連続する可能性がある。

課題としては、登城路の路面の範囲をさらに確認することとともに、排水系統の延長と巽門西側石垣の構築年代等を明らかにすることがあげられる。

引用・参考文献

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000
仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集　1985
仙台市教育委員会『仙台城跡地震災害石垣復旧事業及び史跡整備事業報告書　中門跡・清水門跡』仙台市文化財調査報告書第299集　2006
仙台市教育委員会『仙台城6』仙台市文化財調査報告書第297集　2006
仙台市教育委員会『仙台城11』仙台市文化財調査報告書第365集　2011
仙台市教育委員会『仙台城14』仙台市文化財調査報告書第479集　2019
仙台市教育委員会『仙台城15』仙台市文化財調査報告書第485集　2020
仙台市史編さん委員会『仙台市史　特別編7　城館』2006
藤沢良祐「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの』2006
山崎信二『近世瓦の研究』同成社　2008



第 23 図　巽門跡から清水門跡周辺の遺構配置図

図版1　第35次（登城路跡）

1区調査前（東から）

1区路面全景（北から）

1区南壁断面　（北東から）

1区南部西壁断面　（東から）

1区南部南壁断面　（北から）

1区東西ベルト南壁　（北から）

1区東西サブトレ西壁　（東から）

1区東壁　（西から）

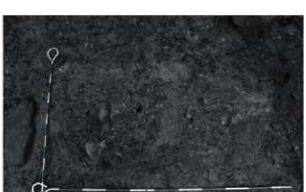
図版 2　第 35 次（登城路跡）

1 区 KS-1185 断面（北東から）

1 区 VIa 層上面（東から）

1 区 KS-1180 石列（北東から）

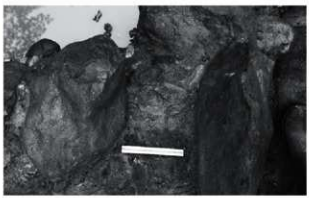
1 区 KS-1180 石列（北西から）


1 区 KS-1180 石列抜き取り痕（北から）

1 区 KS-1190 石敷（南から）

1 区 KS-1185 検出状況（東から）

1 区 KS-1185 石組溝跡南側縁石西部の 2 段積（北東から）



1 区 KS-1185 根固め石（南から）

1 区 KS-1174 集石（南東から）

1 区 KS-1187 石積（北東から）

1 区 Va 層上面の遺物出土状況（東から）

1 区 KS-1179 唐津灰釉皿出土状況（東から）

1 区 KS-1179 軒丸瓦出土状況（南西から）

1 区 KS-1185 木簡出土状況（北から）

1 区大堀相馬土瓶出土状況　（東から）

図版4　第35次（登城路跡）

1区大堀相馬豆寝出土状況　（東から）

1区調査区と清水門石垣　（東から）

1区調査風景（北東から）

2区調査区と巽門跡（北東から）

2区西郭北壁断面（南から）

2区西壁断面（東から）

2区遺構検出状況（平面オルソ画像）

0　1.5m (1/50)

図版5　第35次（登城路跡）

2区西部南壁（北から）

2区西壁断面下部（東から）

2区東部南壁断面（北から）

2区KS-1184溝跡（北から）

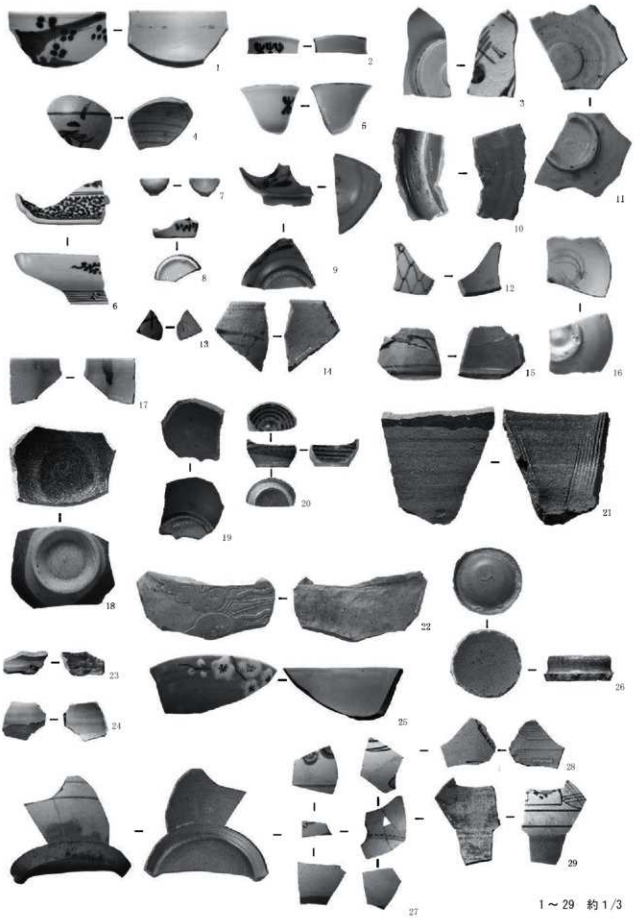
2区Ⅱ層上面検出状況（北西から）

2区KS-1181底部半裁断面（北から）

2区KS-1178石組側溝跡縁石背面（南から）

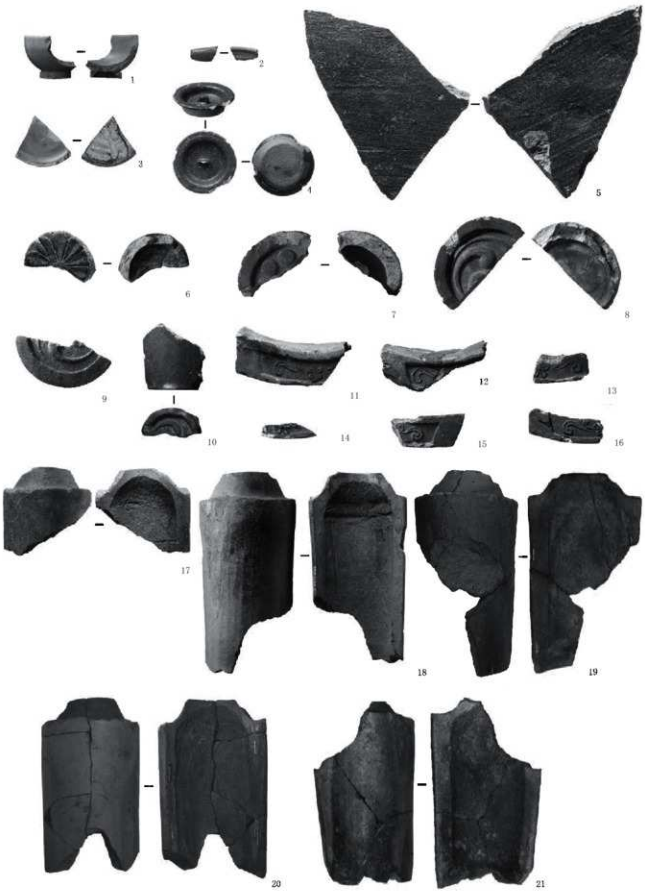
2区KS-1183石列（南から）

図版6　第35次（登城路跡）遺物（1）



1～29　約1/3

図版 7　第 35 次（登城路跡）遺物 (2)



1 ～ 5　約 1/3、 6 ～ 21　約 1/6

図版 8　第 35 次（登城路跡）遺物 (3)

1 ～ 13・16・17　約 1/6、 21　約 1/1、
14 ～ 17 刻印・20　約 1/2、 18・19・22　約 1/3

V　第 36 次調査（三の丸土塁 6 次）

1. 調査の概要

(1) 調査目的

『仙台城跡整備基本計画』（平成 17 年 3 月策定）では、「三の丸整備ゾーン」の「三の丸外構整備区域」として、「水堀や土塁等の近世城郭の外構としての遺構を顕在化」することや、「良好に保存されている土塁の修復」等の整備が計画されている。これまでの三の丸土塁の調査は主に長沼に接する土塁の東側が中心であった。今回の第 36 次調査（三の丸土塁 6 次調査）では、五色沼に接する土塁の北側に調査区を設定し、過去の調査で確認できなかった塀跡等の遺構検出を目指した。また、土塁の北側は、寛文 4 年（1664）～天和 2 年（1682）の間に描かれた仙台城絵図（第 24 図）を見ると、狭間の無い土塀が描かれている。

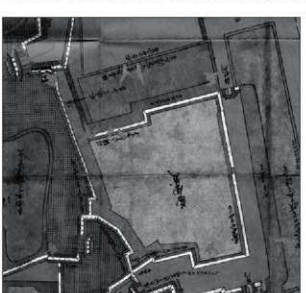
(2) 調査方法

第 36 次調査では、調査区を 3 箇所設定した。1 区は土塁中央部の鉤形に折れる南側であり、2 区は土塁中央部の鉤形に折れる隅角部である。3 区は子門跡西側に接する土塁東端に設定した。調査を開始するにあたり、災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を使用した。これらの基準点を基に、それぞれの調査区に 2 箇所の任意の基準点を設置し、世界測地系座標と標高値を求めた。測量などはそれら基準点を使用した。

調査区設定後、掘削作業は人力により行った。基本的に近世上層面の 1 面のみの調査にとどめたが、攪乱を利用して、下層遺構の確認を行っている。遺構堆積土については、保存の観点から半裁もしくは部分的な掘削にとどめている。遺構の平面図は、調査区周辺に設置した基準点を基に、縮尺 20 分の 1 で作図した。土層断面図については、任意の基準点を設定して作図し、設定した基準点の座標値を計測し、平面図に合成した。今回の調査では、記録写真にデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した。調査区の埋め戻しは、遺構保存のため全面に不織布を敷き、調査区全体を厚さ 10cm 程度の山砂で覆い、その後、掘削土を転圧しながら埋め戻して旧状に戻した。

(3) 調査経過

現地調査は、4 月 17 日に調査区（1 区：3 × 5m、2 区：5 × 5m、3 区：4 × 4m）を設定し、5 月 11 日までに機材の準備を行い、同日から 1 区の表土掘削を開始した。5 月 18 日に表土の除去を完了し、KS-1166 石列を検出した。6 月 9 日には、木による攪乱の範囲に東西に幅 50 cmのサブトレンチを設定し、あわせてサブトレンチの幅で土塁上場の範囲を確認するため東側斜面および西側斜面に調査区を拡張した。6 月 10 日にはサブトレンチ内でKS-1170 石列を検出



「仙台城絵図」寛文 8 年（1668）～天和 2 年（1682）個人蔵

三の丸跡（東丸）の現況地形図（S=1/3500）と調査地

第 24 図　仙台城絵図（三の丸（東丸）土塁北東部）と調査区

した。2 区は、5 月 28 日に表土の除去を終了し、1 区に連続する KS-1166 石列を確認した。6 月 12 日に木等による攪乱の大きい範囲に東西方向に 1 箇所、南北方向に 2 箇所、計 3 箇所のサブトレンチを設定した。6 月 16 日には 1 区の KS-1170 石列に連続する遺構をそれぞれのサブトレンチ内で検出した。3 区は、6 月 2 日に表土の除去を終了し、子門石垣側の土塁の整地土を確認するため、東側に 0.5 × 2.0m の範囲で調査区を拡張した。9 月 7 日に KS-1177 集石遺構を検出した。

1 ～ 3 区の調査区全景写真撮影は 10 月 6 日に行い、撮影終了後、平面図および断面図を作成した。埋め戻しを 10 月 9 日に完了し、現地調査を終了した。

2. 基本層序

1 区と 2 区、3 区においては堆積状況が大きく異なるため、それぞれの調査区で基本層名を付した。以下、区毎にその特徴を記述する。

(1) 1 区

大別 3 層、細別 6 層の基本層を確認した。Ⅰ層は表土で、Ⅱ～Ⅲ層は近世の土塁整地土の可能性がある。

Ⅰ層（表土）

2 層に細分した。近現代に堆積したと考えられ、近代以降の植栽の痕跡や木、竹の攪乱が顕著である。遺物はⅠ b 層から瓦が出土している。

Ⅱ層（近世の土塁整地土）

2 層に細分した。明黄褐色の粘質シルトを主体とした層で、比較的均一な厚さで堆積している。Ⅱ a 層上面で KS-1166 石列を検出している。近世の土塁整地層と考えられる。

Ⅲ層（近世の土塁整地土）

黄褐色の粘質シルトを主体とした層である。Ⅲ層上面で、KS-1170 石列、KS-1171 土坑、KS-1172 土坑を検出している。Ⅱ層盛土以前の土塁整地層と考えられる。

(2) 2 区

大別 3 層、細別 10 層の基本層を確認した。Ⅰ層は表土で、Ⅱ～Ⅲ層は近世の土塁整地土の可能性がある。

Ⅰ層（表土）

2 層に細分した。近現代以降に堆積したと考えられ、近代以降の植栽の痕跡や木、竹の攪乱が顕著である。遺物はⅠ b 層から 17 世紀初頭～前半の唐津産小型鉢（第 33 図 5）と瓦が出土している。

Ⅱ層（近世の土塁整地土）

6 層に細分した。明黄褐色のシルトを主体とした層である。Ⅱ層上面で、KS-1166 石列を検出している。場所により堆積土の様相が変わるが、比較的均一な厚さで堆積している。近世の土塁整地層と考えられる。

Ⅲ層（近世の土塁整地土）

2 層に細分した。明黄褐色の粘質シルトを主体とした層である。Ⅲ層上面で、KS-1170 石列を 3 箇所で検出している。1 区同様にⅡ層盛土以前の土塁整地層と考えられる。

(3) 3 区

大別 5 層、細別 10 層の基本層を確認した。Ⅰ層は表土で、Ⅱ～Ⅲ層は近代の石垣が積み直された際の盛土と考えられる。Ⅳ～Ⅴ層から近世の土塁整地土と考えられる。

Ⅰ層（表土）

近現代以降に堆積したと考えられ、近代以降の植栽の痕跡や木、竹の攪乱が顕著である。遺物は瓦とガラス片が出土している。

Ⅱ～Ⅲ層（近・現代の石垣積み直し時の盛土）

Ⅱ層を 3 層に細分した。暗褐色の粘質シルトが主体である。遺物は瓦とガラス片、ぬいぐるみが出土している。Ⅲ層を 2 層に細分した。明黄褐色のシルトが主体であるが、1・2 区で確認している土塁整地土に比べ、しまりが無く、ガラス片が混ざることから近代以降の盛土と考えられる。子門脇石垣は昭和 36 年（1961）の仙台市博物館建設時に子

門の道路拡幅に伴い石垣が積み直されており、Ⅱ～Ⅲ層はその際に盛土された整地土と考えられる。

Ⅳ層（近世の土塁整地土）

2層に細分した。明黄褐色の粘性シルトが主体である。Ⅳa層上面で、KS-1177集石遺構を検出している。場所により堆積土の様相が変わるが、比較的均一な厚さで堆積している。近世の土塁整地層と考えられる。

Ⅴ層（近世の石垣背面ぐり層）

近・現代における石垣積み直し時の掘り込みに切られている層である。黄褐色の粘質シルトが主体で、径10～22cmの玉石が多く含まれることから、石垣背面のぐり層の可能性が考えられる。遺物は、瓦が多く出土しており、Ⅴ層から棟込菊丸瓦（第33図7）が出土している。

Ⅵ層（近世の土塁整地土）

明褐色シルトが主体である。大きさ5～30cmの板状の脆い凝灰岩が堆積している。3区全域で確認し、厚さは1m以上堆積していることが確認され、土塁整地土と判断した。

3．1区検出遺構

（1）塀跡

土塁の頂部平坦面の堀側に寄った位置で、検出面が異なる2条の石列を検出した。両者の新旧関係は、KS-1166がKS-1170より新しい。遺構の残存状況については、両者とも樹木の根などによるかく乱があり石列が整然としていない箇所もあるが、その掘方と石列を構成する円礫の分布状況により遺構の範囲および方向を確認した。これらの石列については、土塁頂部における検出位置や土塁に沿って延長することから、塀跡と判断した。類例としては、仙台城二の丸跡南西部で、並行する2列の石列の間に円礫が充填された遺構が検出されている（東北大学埋蔵文化財調査室1990）。また、山形城跡二ノ丸土塁の頂部でも同じ構造の遺構が確認されており、塀の礎石列として報告されている（山形市教育委員会2020）。今回、確認した石列は、遺構の残存状況に違いはあるものの上述の類例と同様の構造をもつと遺構と想定される。

なお、城絵図における三の丸土塁については、北側土塁にのみ土塀の表現がみられ（「仙台城絵図」寛文8年（1668）～天和2年（1682））、東側土塁では、特に構造物が描かれた事例は今のところ確認されていない。この事は、東側土塁の過年度調査において頂部から明確な遺構が検出されていない点や、今回、北側土塁で検出したKS-1166、KS-1170を塀跡とする解釈とも矛盾しない。

KS-1170石列（Ⅰ期塀跡） 西部の東西サブトレンチ内で確認した南北方向に延びる石列である。掘方の掘り込み面はⅢ層上面である。堆積土は2層確認され、シルト質粘土が主体である。規模は、東西85cm、南北60cm以上で、さらに南北へ延びる。石材は楕円形の川原石が用いられており、石材の大きさは平均で10cm×20cmである。また堀側（西側）の石材が大きい傾向にあり、長軸を堀側に向けて並んでいる。石列の方向は、N-0～2°-Eで南北軸を意識して敷設されている。この石列は、土塁上面の堀側（西側）で確認している。遺物は出土していない。

KS-1166石列（Ⅱ期塀跡） 調査区の西半部で確認した南北方向に延びる石列である。KS-1170石列に比べ、石材は散乱しており、かろうじて帯状に確認できる状態である。Ⅱa層上面から掘り込まれ構築されている。堆積土は単層でシルト質粘土が主体である。規模は、東西1.06m、南北4.7m以上で、さらに南北へ延びる。石材は川原石が主体で、大きさは径5cm～20cmとさまざまである。方向はN-0～2°-Eで南北軸を意識して敷設されている。KS-1170石列の廃絶後にⅡ層が盛土され、新たに土塁上面が整地された後にKS-1166石列が構築されている。遺物は出土していない。

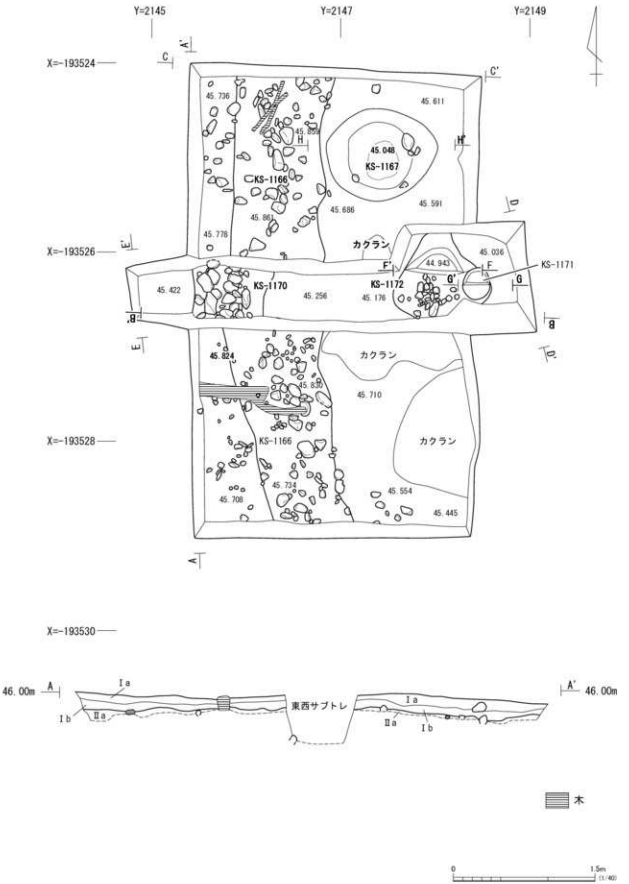
（2）ピット

KS-1171 東部の東西サブトレンチ内で確認した。Ⅲ層上面から掘り込まれている。重複関係はKS-1166より古くKS-1172より新しい。堆積土は単層である。平面形は円形で、規模は東西29cm、南北32cm、深さ10cmである。遺物は出土していない。

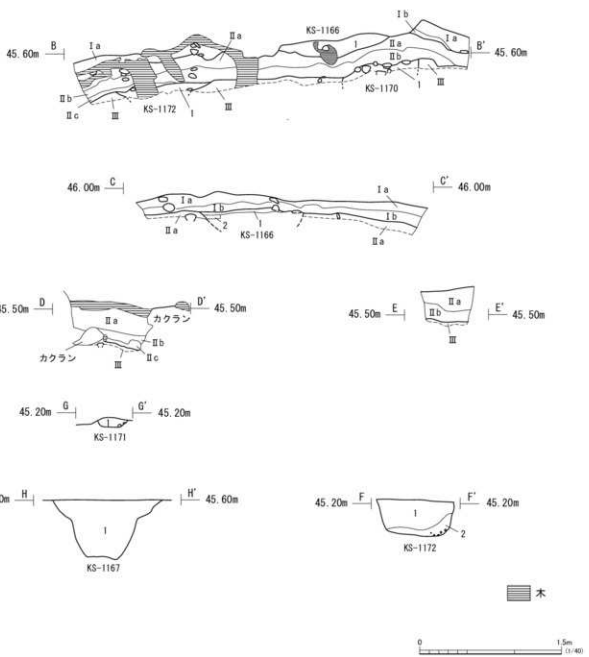
（3）土坑

KS-1167 北部のⅡa層上面で確認した。平面形は円形で、規模は東西1.16m、南北1.0m、深さ0．63mである。堆積土は単層である。10YR3/3暗褐色の粘質シルトが主体で、木の腐植土を多く混入することから、植栽痕の可能性がある。遺物は、堆積土から刀装具の切羽（第34図7）が出土している。

KS-1172 東部の東西サブトレンチ内で確認した。Ⅲ層上面から掘り込まれている。重複関係はKS-1166、KS-1171より古い。平面形は楕円形で、規模は東西1.03m、南北0.90m、深さ34cmである。堆積土は2層確認した。上面には径5～15cmの円礫が集中している。柱跡等の根固め石とも考えられるが、KS-1170石列と2m離れているため塀に関連する控柱跡とは断定できなかった。遺物は出土していない。



第 25 図　1 区平面図・断面図



遺構・層位		土色		土質	土性	備考
		土色No.	土色		しまり	
表土	Ⅰa	10YR3/10	黒褐色	砂質シルト	なし	現表土
	Ⅰb	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	なし	木の根を多く含む
土塁整地土	Ⅱa	10YR6/8	明黄褐色	粘質シルト	あり	径5～10cmの円礫を含む　7.5YR5/8の粘土質シルトを縞状に含む
	Ⅱb	10YR5/6	黄褐色	粘質シルト	あり	7.5YR5/8の粘土質シルトブロックを含む　酸化鉄粒を少量含む
	Ⅱc	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	なし	径5～10cmの円礫を含む　炭化物が少量含む
土塁整地土	Ⅲ	10YR5/8	黄褐色	シルト質粘土	強い	10YR8/2の粘土質シルトを縞状に含む　炭化物を少量含む
KS-1170	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強い	10YR2/2黒褐色粘質土ブロックを少量含む
	2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強い	10YR2/2黒褐色粘質土ブロックを少量含む
KS-1166	1	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	あり	径1～5cmの円礫を多量含む
KS-1171	1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	なし	10YR6/8明黄褐色粘質土ブロックを含む　炭化物を含む
KS-1167	1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	あり	径1～2cmの円礫を含む　腐食土を含む
KS-1172	1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	なし	10YR6/8明黄褐色粘質土ブロックを含む
	2	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	あり	黒色ブロックと黄橙色（10YR7/6）ブロックを含む

第26図　1区断面図

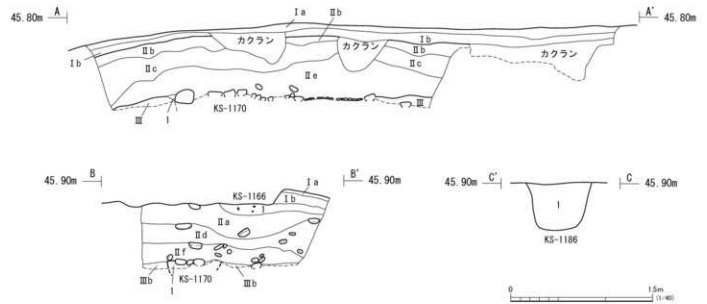
4. 2 区検出遺構

(1) 塀跡

KS-1170 石列（Ⅰ期塀跡） 調査区 3 箇所のサブトレンチ内で確認した石列である。1 区の KS-1170 石列に連続する遺構と考えられることから、同じ遺構番号を付した。掘方の掘り込み面はⅢ層上面である。南北サブトレンチ内では南側の掘り方は確認できなかった。堆積土は 2 層確認され、シルト質粘土が主体である。確認した長さは、南北 44 ㎝、東西 1.26m で、さらに東へ延びるとが推定される。石材は楕円形の川原石が用いられており、石材の大きさは平均で短軸 7 ㎝×長軸 20 ㎝である。調査区東端部では KS-1170 石列の南側に径 1 ～ 7 ㎝の川原石が敷かれている。遺物は出土していない。

KS-1166 石列（Ⅱ期塀跡） 調査区の西部で確認した南北方向に延びる石列である。1 区の KS-1166 石列に連続する遺構と考えられることから、同じ遺構番号を付した。Ⅱ a 層上面から掘り込まれ構築されている。1 区同様に帯状の集

第 27 図　2 区平面図



遺構・層位		土色		土質	土性 しまり	備考
		土色 No.	土色			
表土	Ⅰa	10YR3/10	黒褐色	砂質シルト	なし	現表土
	Ⅰb	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	なし	木の根を多く含む
土塁整地土	Ⅱa	10YR7/8	黄橙色	シルト	あり	径 1 ～ 2 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅱb	10YR7/6	明黄褐色	シルト	あり	径 1 ～ 2 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅱc	10YR7/8	黄橙色	シルト	あり	径 1 ～ 2 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅱd	7.5YR5/8	明褐色	シルト	あり	径 1 ～ 15 cmの円礫を含む　酸化鉄粒を含む
	Ⅱe	10YR6/6	明黄褐色	シルト	あり	径 1 ～ 10 cmの円礫を含む　径 0.5 ～ 1 cm大の凝灰岩片を含む
	Ⅱf	7.5YR4/6	褐色	シルト	あり	径 1 ～ 15 cmの円礫を含む　酸化鉄粒を含む　凝灰岩片を含む
土塁整地土	Ⅲa	10YR6/8	明黄褐色	粘質シルト	あり	黒色 (10YR2/2) 粘性土ブロックを含む　酸化鉄粒を微量に含む
	Ⅲb	7.5YR4/4	褐色	粘質シルト	あり	凝灰岩片を含む
KS-1170	1	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強い	10YR2/2 黒褐色粘質土ブロックが少量含む
	2	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	強い	10YR2/2 黒褐色粘質土ブロックが少量含む
KS-1166	1	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	あり	径 1 ～ 5 cmの円礫を多量含む
KS-1186	1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	あり	径 1 ～ 2 cmの円礫を多量含む　腐植土を含む

第 28 図　2 区断面図

石が認められる。掘方は、東側で確認し、東西方向に屈曲を見せる。Ⅱ層上面は全体的に木による攪乱の範囲が多く、さらに東側への延長部分を確認することはできなかった。堆積土は単層で、シルト質粘土が主体である。規模は、東西 1m 以上、南北 4.7m 以上で、さらに南へ延びる。石材は川原石で、大きさは径 5 cm～ 20 cmとさまざまである。遺物は出土していない。

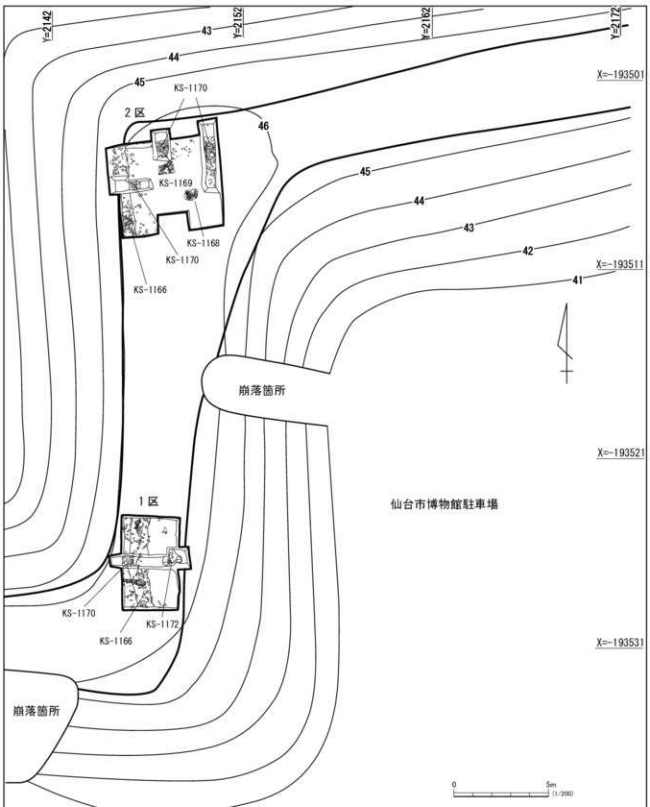
(2) 集石遺構

KS-1168　南東部のⅡb層上面で確認した集石である。掘方の平面形は不整円形で、規模は東西 72 cm、南北 54 cmである。径 2 ～ 10 cmの円礫が敷き詰められている。柱跡等の根固めの可能性があるが、周囲に柱跡等がなく、KS-1166 石列から約 3m 以上離れていることから、塀跡に関連する遺構とは判断できなかった。KS-1166 石列よりも一段古い時期の遺構と考えられる。遺物は出土していない。

KS-1169　南東部のⅡb層上面で確認した集石である。掘方の平面形は不整隅丸方形と推定され、規模は、東西 80 cm 南北 64 cm以上である。径 2 ～ 10 cmの円礫が敷き詰められている。KS-1168 集石遺構と同様の構造である。遺物は出土していない。

(3) 土坑

KS-1186　東端中央部のⅡb層上面で確認した土坑である。平面形は不整円形で、規模は東西 70 cm、南北 60 cm、深さ 50 cmである。堆積土は単層である。10YR3/3 暗褐色の粘質シルトを主体としており、木の腐植土が多く混入することから、植栽痕の可能性がある。堆積土から近代の瓶が出土しているため、近代以降のものと考えられる。



第 29 図　1・2 区遺構平面図

5．3 区検出遺構

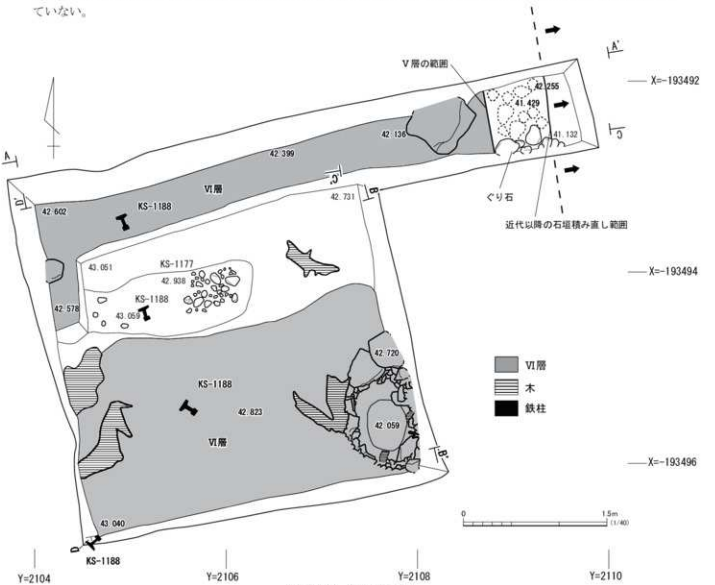
(1) ぐり石

調査区拡張部の東端で子門石垣背面のぐり石とみられる集石を確認した。Ⅴ層中で確認した。範囲は、東西 74 ㎝、南北 30 ㎝である。径 10 ～ 22 ㎝の玉石が用いられている。Ⅴ層は、近代以降の遺物が含まれず、近代以降の石垣積み直し時の掘り込みに切られている状況から、本来の石垣背面にあったぐり層である可能性が高い。また、現在の石垣天端石上面より 20 ㎝高い位置で検出している。そのため積み直し以前は、現在よりも高い位置まで石垣があったことが推定される。

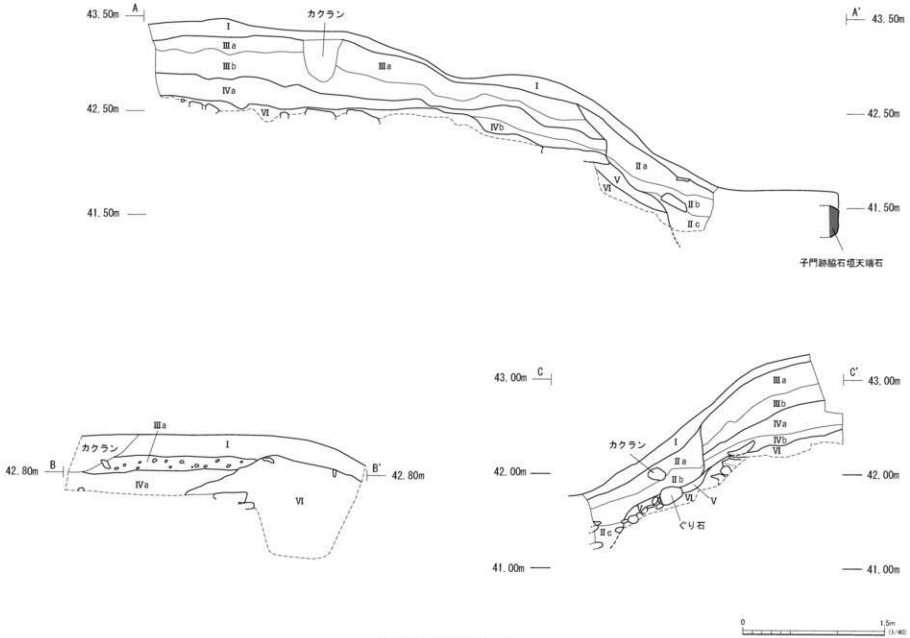
現在の子門脇石垣の積み方の様相は、近代以降に見られる谷積みが主体で、築石との間はコンクリートで固められており、近代以降において大きく積み直されていることが考えられる。少なくとも昭和 36 年（1961）の仙台市博物館建設時に子門の道路拡幅により積み直されているが、当時のものか不明である。拡張部断面で確認した Ⅲ a 層上面から石垣側にかけての大きな掘り込みは、近代以降の石垣積み直し時のものと考えられる。

(2) 集石遺構

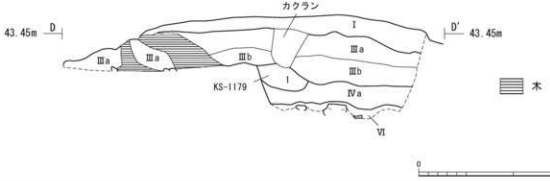
KS-1177　西部のⅣ a 層上面で確認した集石である。掘り方の平面形は不整楕円形で、規模は東西 2.10m 以上、南北 64 ㎝である。径 2 ～ 15 ㎝の円礫が用いられている。さらに南西方向に延びることが推定される。1・2 区で確認した KS-1166 石列と関連する可能性があるが、距離が離れており、KS-1166 と断定せず遺構番号を分けた。遺物は出土していない。



第 30 図　3 区平面図


43.50m
A
A'
カクラン
Ⅰ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
Ⅳb
Ⅵ
Ⅱa
Ⅴ
Ⅱb
Ⅱc
42.50m
41.50m
子門跡脇石垣天端石
B
B'
42.80m
43.00m
C
C'
42.00m
41.00m
ぐり石
0
1.5m
(1/40)

第31図　3区断面図 (1)



遺構・層位		土色		土質	土性	備考
		土色 No.	土色		しまり	
表土	Ⅰ	10YR3/2	黒褐色	シルト	なし	現表土
石垣積み直し時の盛土	Ⅱa	10YR4/4	褐色	粘質シルト	なし	径 1 ～ 2 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む　瓦片を多量含む
	Ⅱb	10YR5/3	にぶい褐色	粘質シルト	なし	径 1 ～ 4 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
	Ⅱc	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	なし	径 1 ～ 4 cmの円礫を含む　凝灰岩ブロックを含む
近代盛土	Ⅲa	10YR7/4	にぶい黄橙色	シルト	なし	径 2 ～ 4 cmの円礫を含む
	Ⅲb	10YR7/6	明黄褐色	シルト	ややあり	径 2 ～ 5 cmの円礫を含む　7.5YR6/7 明褐色砂質土を含む
土塁整地土	Ⅳa	10YR6/6	明黄褐色	シルト	ややあり	径 2 ～ 5 cmの円礫を含む　7.5YR6/7 明褐色砂質土を含む
	Ⅳb	10YR7/6	明黄褐色	シルト	ややあり	径 2 ～ 5 cmの円礫を含む　7.5YR6/8 明褐色砂質土を含む
石垣背面ぐり層	Ⅴ	10YR5/8	黄褐色	粘質シルト	あり	径 10 ～ 30 cmの円礫を多量含む（ぐり石）　径 1 ～ 6 cmの凝灰岩を含む
土塁整地土	Ⅵ	7.5YR5/6	明褐色	シルト	あり	径 1 ～ 30 cmの板状の凝灰岩片を多量に含む
KS-1177	1	7.5YR6/8	明褐色	砂質土	なし	径 0.5 ～ 5 cmの円礫を多量含む　酸化鉄粒を微量含む

第 32 図　3 区断面図 (2)

(3) 鉄柱列（鉄道レール）

KS-1188　西部の地表面で 4 本の鉄柱を確認した。掘り方はなく、垂直方向に突き刺さった状態で確認した。長さは、155 cm以上で、上端部に叩いて潰れた痕跡があり、打ち込んだ形跡と考えられる。レールの断面形状は昭和 37 年に旧国鉄によって設計された 50 kgN レールに類似しているため、昭和 37 年以降と考えられる（田中 2011）。

6. 出土遺物

(1) 1 区

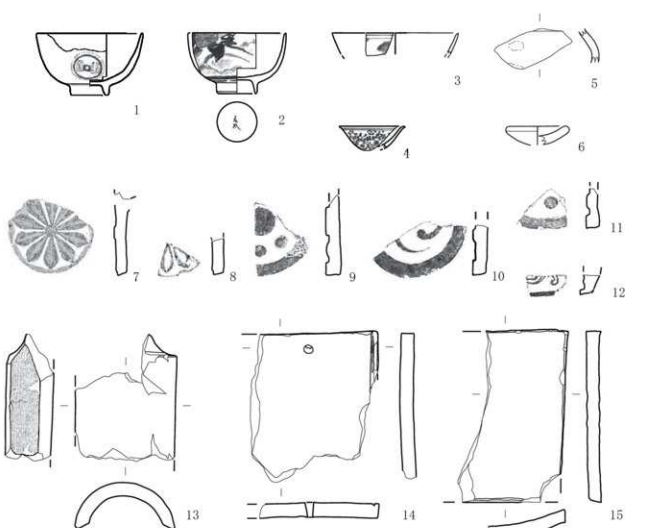
出土した遺物は、瓦 2 点、金属製品 1 点である。金属製品は、刀装具の切羽（第 34 図 7）である。刃形が小さいため、小刀に付属したものと考えられる。瓦は、丸瓦 1 点、桟付平板瓦 1 点が出土しており、桟付平板瓦は塀に伴う。

(2) 2 区

出土した遺物は、陶磁器 5 点、土師質土器 1 点、瓦 66 点、金属製品 2 点、ガラス 1 点である。陶磁器は、Ⅰa 層から、飛鉋の文様がある、鉄釉が施された大堀相馬産の瓶類が出土している。時期は、19 世紀前半と考えられる。Ⅰb 層から、長石釉が施された唐津産の小型鉢（第 33 図 5）が出土している。時期は、17 世紀初頭～前半と考えられる。土製品は、Ⅰa 層から、小型の土師質土器（第 33 図 6）が出土している。手づくねの小型皿であり、地鎮に関連した可能性もある。瓦は、平瓦が 4 点、丸瓦が 3 点、飾り瓦が 1 点出土している。金属製品は、Ⅰb 層上面から、材木を接合する際に用いられるカスガイ（第 34 図 8）が出土している。

(3) 3 区

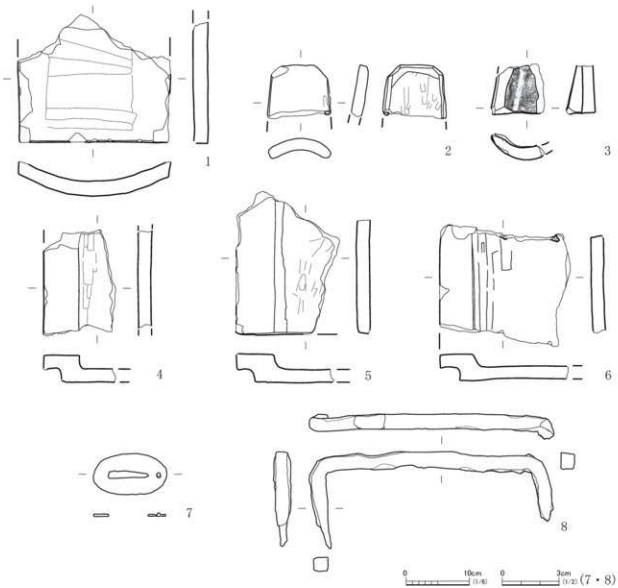
出土した遺物は、陶磁器 5 点、瓦 236 点、ガラス 1 点である。陶磁器は、Ⅰ層から、19 世紀～ 20 世紀の時期が考えられる古銭の文様が施された碗（第 33 図 1）と、明治期のものと考えられる梅樹文が施された瀬戸美濃産の小坏（第 33 図 4）が出土している。Ⅱa 層から、19 世紀～ 20 世紀のものと考えられる九谷焼産の碗（第 33 図 2）が出土している。瓦は、平瓦（第 33 図 14・15）が 5 点、軒平瓦（第 33 図 12）が 2 点、丸瓦が 8 点、軒丸瓦（第 33 図 9・10・11）が 3 点、棟込菊丸瓦（第 33 図 7・8、第 34 図 2）が 3 点、輪違（第 34 図 3）が 10 点、面戸 1 点、塀に伴う厚い塀瓦、桟付平板瓦（第 34 図 4・5・6）が 7 点出土している。



図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	釉薬・文様等	備考	写真図版
1	42	磁器	染付	3 区 Ⅰ		碗	19c ～ 20c	(83)	(26)	49	古銭の文様		12-1
2	34	磁器	染付	3 区 Ⅱ a	九谷	碗	19c ～	(78)	32	48		高台内に「九谷」の銘あり	12-2
3	16	磁器	染付	2 区南部 Ⅰ a	肥前	碗	17c ？	(100)	(-)	(17)		漆継ぎの跡	12-3
4	46	磁器	染付	3 区 Ⅰ	瀬戸美濃	小坏	明治時代	(52)	(-)	(18)	梅樹文		12-4
5	13	陶器		2 区東部 Ⅰ b	唐津	小型鉢	17c 初頭～前半	(-)	(-)	(26)	長石釉		12-5
6	14	土師質土器		2 区南東部 Ⅰ a		小型皿		(50)	(-)	(15)			12-6

図中番号	遺物番号	種別	種類	文様	遺構・層位	法量 (mm)	重さ (g)	備考	写真図版
7	27	瓦	棟込瓦	菊花文	3 区東側拡張部 Ⅴ	瓦当径 134 後幅 (-) 長さ (-) 厚さ（差し込み部）(-) 隅部高さ (-) 瓦当厚さ 15	270		12-7
8	68	瓦	棟込瓦	菊花文	3 区 Ⅰ	瓦当径 (52) 後幅 (-) 長さ (-) 厚さ（差し込み部）(-) 隅部高さ (-) 瓦当厚さ 17	60		12-8
9	28	瓦	軒丸瓦	九曜文	3 区東側拡張部 Ⅴ	瓦当径 (111) 内区径 (90) 周縁幅 20 周縁深さ 5 瓦当厚さ 23	190		12-9
10	74	瓦	軒丸瓦	三巴文	3 区 Ⅰ	瓦当径 (155) 内区径 (110) 周縁幅 23 周縁深さ 3 瓦当厚さ 21	300	巴（左巻き）	12-10
11	52	瓦	軒丸瓦	九曜文	3 区東側拡張部 Ⅱ b	瓦当径 (63) 内区径 (43) 周縁幅 21 周縁深さ 6 瓦当厚さ 21	90		12-11
12	81	瓦	軒平瓦	ヲ・唐草	3 区 Ⅰ	瓦当幅 (60) 後幅 (-) 長さ (-) 弧深 (-) 厚さ (-) 瓦当高さ (-) 瓦当厚さ 20 内区幅 (65) 内区高さ (23) 周縁深さ 7	50		12-12
13	103	瓦	丸瓦		3 区 Ⅰ	前幅 (148) 後幅 (160) 長さ (190) 高さ 73 厚さ 21 玉縁先幅 (-) 玉縁長さ (28)	960		12-13
14	102	瓦	平瓦		3 区 Ⅰ	前幅 (192) 後幅 (186) 長さ (27) 高さ 23 厚さ 21 水切深さ 21 水切幅 5	1360		12-14
15	58	瓦	平瓦		3 区拡張部 Ⅱ a	前幅 (124) 後幅 (130) 長さ 269 厚さ 20 高さ 58	1160	2 点接合	12-15

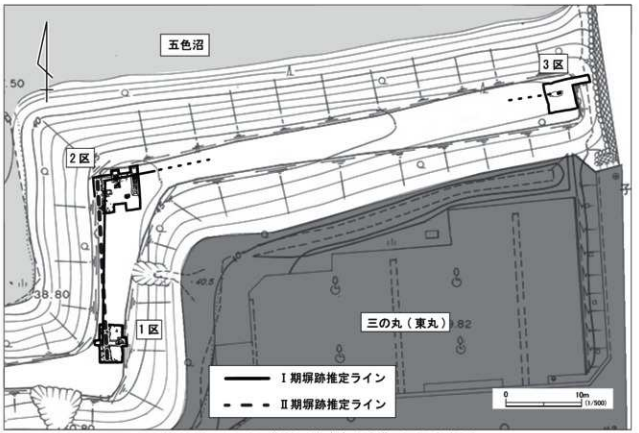
第 33 図　第 36 次調査（三の丸土塁）出土遺物 (1)



図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	法量（mm）	重さ（g）	備考	写真図版
1	89	瓦	平瓦	3区拡張部　Ⅱn	前幅（235）後幅（241）長さ（202）高さ 54 厚さ 24	1480		12-16
2	82	瓦	棟込（菊丸、差込み）	3区　Ⅰ	後幅（53）長さ（91）厚さ 18	190		12-17
3	20	瓦	輪違い	3区　Ⅰ	前幅（83）後幅（-）長さ（75）高さ 41 厚さ 20	160		12-18
4	9	瓦	瓪瓦（桟付平板）	3区　Ⅰ	幅（114）長さ（167）高さ 42 厚さ 20 桟幅 56 桟長さ（164）桟下幅 28 桟下厚さ 21	710		12-19
5	5	瓦	瓪瓦（桟付平板）	3区東側拡張部　V	幅（164）長さ（226）高さ 47 厚さ 21 桟幅 59 桟長さ（215）桟下幅 29 桟下厚さ 22	1230		12-20
6	10	瓦	瓪瓦（桟付平板）	3区　Ⅰ	幅（191）長さ（23）高さ 42 厚さ 19 桟幅 52 桟長さ（170）桟下幅 31 桟下厚さ 17	1180		12-21
写	36	瓦	飾瓦（不明）	3区東側拡張部　Ⅱa	全長 60	60		12-22

図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	生産地	製作年代	法量（mm）	文様等	備考	写真図版
7	17	金属製品	切羽	1区　KS-1167 堆積土			全長 38　厚さ 1		小刀に付属	12-23
8	18	金属製品	カスガイ	2区北西部　Ⅰb上面			全長 99　厚さ 9			12-24

第 34 図　第 36 次調査（三の丸土塁）出土遺物 (2)



第 35 図　1 ～ 3 区塀跡に関連する遺構平面図 (1/500)

7. まとめ

1・2 区では、2 時期の塀跡と考えられる KS-1170 石列（Ⅰ期塀跡）および KS-1166 石列（Ⅱ期塀跡）を 2 条確認した。検出面の違いから、Ⅲ層上面の KS-1170 石列（Ⅰ期塀跡）が廃絶した後、土塁の堆積土（Ⅱ層）を 20 ～ 50 cmかさ上げして、KS-1166 石列（Ⅱ期塀跡）が構築されていることを確認した。今回の調査では、三の丸（東丸）を囲む土塁の北側に、塀が築かれていたことを確認した。しかし、残存状況による制約もあり、遺構自体から、明確な塀の構造を解明するまでには至らなかった。また、遺物も少なく 2 時期の具体的な年代も判明していない。これらを課題として、今後更なる調査、検討が必要である。

3 区では、子門跡西側の土塁積土を確認し、子門石垣のぐり石とみられる集石と、近代以降における石垣を積み直した範囲を確認した。また、塀跡に関連した可能性がある東西方向に延びる集石も確認している。

遺物は、陶磁器および金属製品は少なく、瓦は 304 点出土している。金属製品ではカスガイが出土している。瓦の中で特筆すべきものとして、桟付平板瓦が 7 点出土している。桟付平板瓦は、反りがほとんどない平瓦に桟を付けたもので、目板瓦・塀桟瓦とも呼称されている。桟付平板瓦は、主に塀に使用される瓦で、三の丸（東丸）内では、95 点出土している（仙台市教育委員会 1985）。また二の丸跡南西端（現東北大学理学部植物園裏）では、塀の基礎と考えられる石垣状遺構が確認されており、桟付平板瓦も遺構に伴って出土している（東北大学理蔵文化財調査室 1990）。今回検出した状況と類似するものと考えられ、今後、塀に関連する瓦として、さらに調査を続ける必要がある。

引用・参考文献

仙台市教育委員会『仙台城三ノ丸跡』仙台市文化財調査報告書第 76 集　1985
田中鉄二他「規定を中心にしてみる我が国の鉄道保護の歴史」（『土木学会論文集』（土木史）vol. 67 ）2011
東北大学理蔵文化財調査委員会『東北大学理蔵文化財年報 3』1990
山形市教育委員会『史跡山形城跡発掘調査報告書　二ノ丸土塁』山形市埋蔵文化財調査報告書第 39 集　2020

図版 9　第 36 次（三の丸土塁）

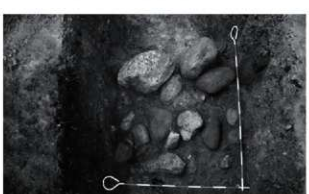
1 区 東西サブトレ南壁西部断面（北から）

1 区 東西サブトレ北壁西部断面（南から）

1 区 調査区西壁断面北部（東から）

1 区 東西サブトレ南壁東部断面（北から）

1 区 KS-1166 石列検出状況（南から）



1 区 KS-1170 石列検出状況（西から）

1 区 KS-1172 土坑検出状況（東から）

1 区 KS-1167 土坑切羽出土状況（西から）

図版 10　第 36 次（三の丸土塁）

2 区調査区全景（東から）

2 区南北サブトレ東部東壁断面（西から）

2 区東西サブトレ南壁断面（北から）

2 区 南北サブトレ中央 KS- 1170 石列（西から）

2 区 南北サブトレ東部 KS- 1170 石列（北から）

2 区 KS- 1166 石列（南西から）

2 区 KS- 1168 集石（北から）

2 区 KS- 1169 集石（西から）

図版 11　第 36 次（三の丸土塁）

2 区 Ⅰb 層カスガイ出土状況（東から）

2 区調査風景（南西から）

3 区調査区全景（西から）

3 区北壁断面（南から）

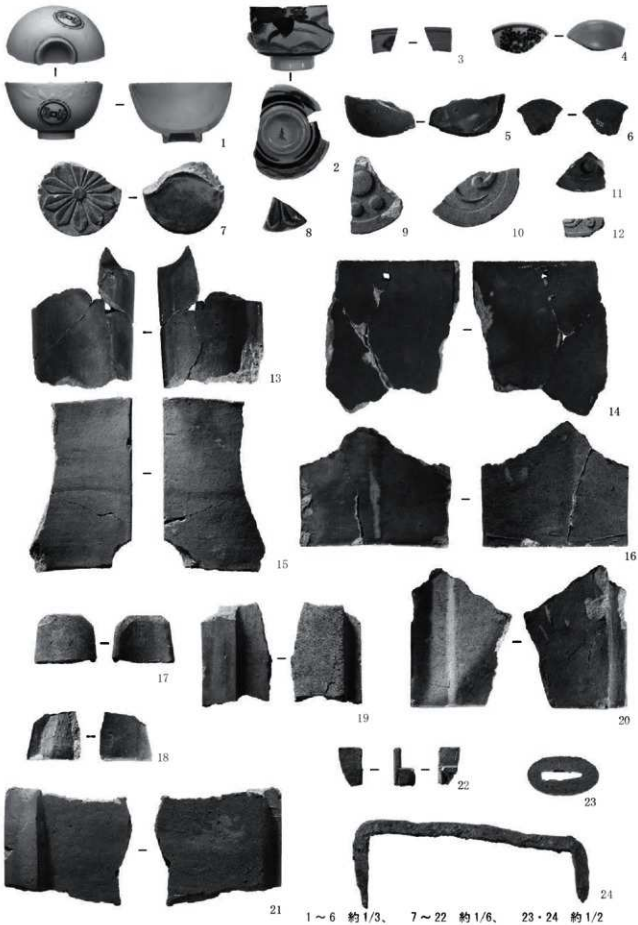
3 区拡張部南壁断面（北東から）

3 区 KS-1177 集石（北から）

3 区南東部Ⅴ層堆積状況断面（北東から）

3 区Ⅳ層上面菊丸瓦出土状況（東から）

図版 12　第 36 次（三の丸土塁）遺物



1 ～ 6　約 1/3、　7 ～ 22　約 1/6、　23・24　約 1/2

Ⅵ　第 37 次調査（沢門下石垣 2 次）

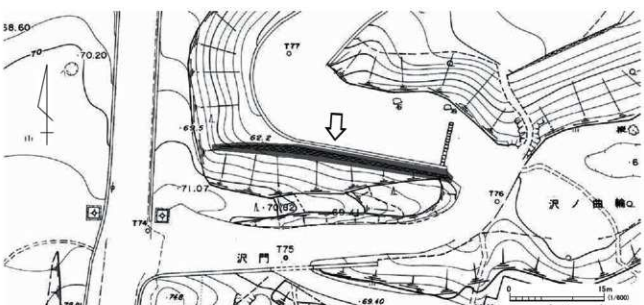
1. 調査の概要

(1) 調査目的

第 37 次調査では、巽門跡から沢門跡へと至る登城路跡周辺に存在する石垣の現況確認および今後の登城路跡整備の基礎的なデータ収集を目的に、測量調査を行った。対象とした石垣は、沢門跡下にある石垣である（以下、「沢門下石垣」）。なお、沢門下石垣は、平成 16 年度の第 5 次調査で測量調査を行っており（『仙台城跡 5』）、その際には写真測量とレーザー計測を行っている。

(2) 調査方法と調査経過

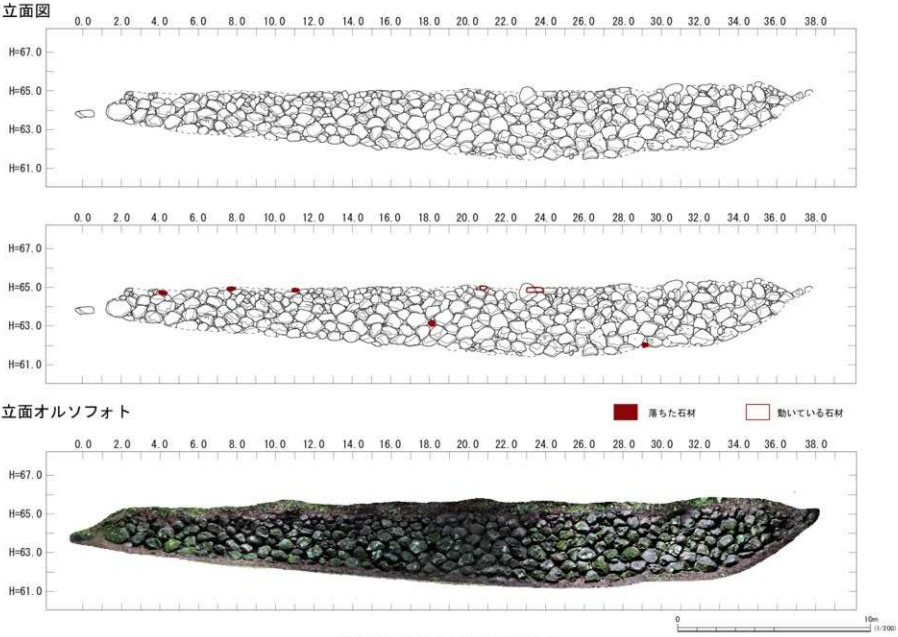
今回の調査は、沢門下石垣の 1 面が対象で、立面積は合計 126 ㎡である。調査を開始するにあたり、基準点として災害復旧事業で清水門石垣の測量のために設置された基準点を確認して使用した。測量作業は、7 月 13 日から石垣の清掃作業および周辺の除草作業を行い、7 月 14 日に基準点確認のための測量を行った。基準点の座標および標高にズレが無いことを確認した上で、7 月 17 日から石垣のレーザー計測に入り、石垣の三次元情報を取得した。



沢門跡周辺の現況地形図（S=1/600）と調査地

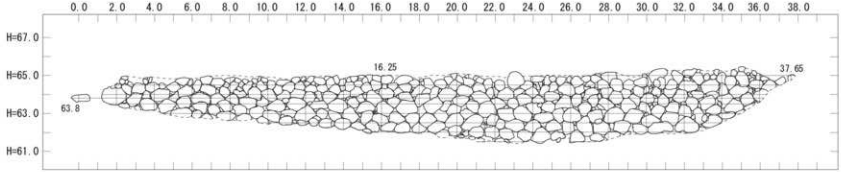
「奥州仙台城并城下絵図」（部分）天和 2 年（1682）宮城県図書館所蔵

第 36 図　仙台城絵図（沢門・沢曲輪跡周辺）と調査地

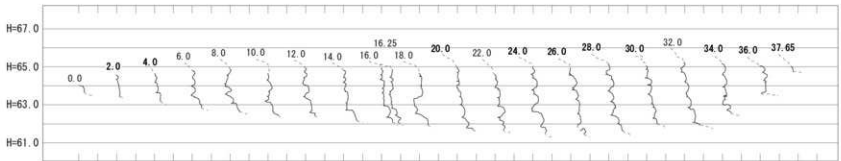


第 37 図　立面図・立面オルソフォト

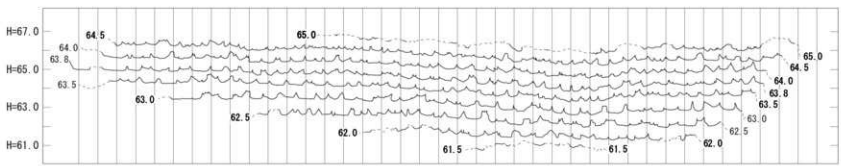
断面位置図



縦断図



横断図



第 38 図　縦断図・横断図

2. 測量成果

(1) 石垣

沢門下石垣は、総延長は 38.2m あり、現地表面から最大で 8 段分（高さ 3.62m）が確認できる。築石に使用される石材はほとんどが自然石で、一部、石の表面を加工した石材が見られ、矢穴のある石材も数石確認できる。また築石にルートハンマーを打ち込んだ痕跡があるものを 8 石確認した。近代において石材を利用しようと試みたことが考えられる。天端石は、樹木の影響で、欠損箇所が多い。

震災以前に実施された平成 16 年度測量と比べて、築石がずれている箇所と、間詰石が抜け落ちていることを確認した。変状箇所は、第 37 図に図示した。築石のずれは、天端石 2 箇所で、間詰石の欠損は、5 箇所を確認した。また、縦横断面の比較では、大きな変状は認められない。

測量成果から石垣面について見ていくと、築石の横幅が 1m を超える石材が多数使用され、乱積みではあるが、横目地が比較的通る布積みで、天端石の石材も高さが揃えられる傾向にある。西側は、やや横目地が通らない乱積みで積まれる傾向がみられる。

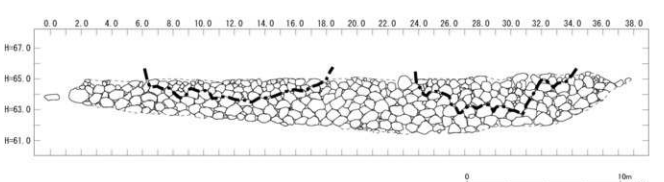
石垣の年代については、野面積みが主体であることから近世初期段階と推定される。積み方の特徴としては、幅 1m 以上の横長の自然石を横目地が比較的通るように積む傾向にある。築石の表面は、自然面と割面が混在している。築石の間には、隙間があり石積みに際し上下の「合間」部分の調整のため、一部に加工がみられ、その間に割石や玉石が間詰めされている。これらの石積の特徴は、本丸北壁石垣で検出した I 期石垣と西門石垣 F 面と類似し、仙台城では慶長年間にみられる積み方である。

石垣の修復履歴については、現在確認できる「御修復窺絵図」等の絵図・文献からは、確認できない。石垣の面の観察では、面東側および西側の上段から中段にかけて目地が通らず、石材の大きさが小ぶりになる。また積み方が乱積みの傾向が強くなることから、積み直しが行われた可能性がある。

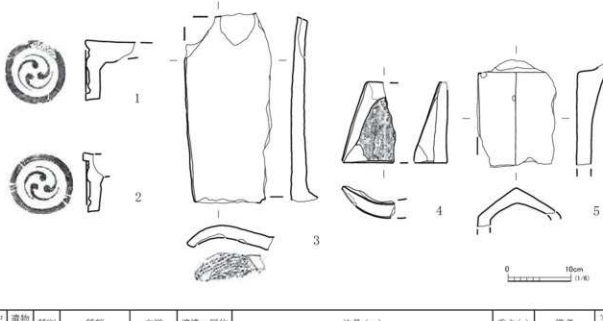
3. 出土遺物

調査前の清掃時に沢門下石垣の前面で採取した遺物について詳述する。遺物は磁器 1 点と瓦 16 点であり、その内の 5 点を図示した。

第 40 図 1 ～ 3 は軒桟瓦で、1、2 は瓦当に三巴文が配される。三巴文は尾部が左巻きである。第 40 図 4 は棟込みの輪違いである。第 40 図 5 は伏間瓦の箱冠である。これらのほかに、図示していないが、丸瓦もあり、輪違いや桟瓦、熨斗瓦、塀瓦などもある。



第 39 図　石垣面に見られる積み方の違い



図中番号	遺物番号	種別	種類	文様	遺構・層位	法量（mm）	重さ(g)	備考	写真図版
1	3	瓦	軒桟瓦	三巴文	表採	瓦当径 95 内区径 71 周縁幅 11 周縁深さ 6 瓦当厚さ 21	410	巴（左巻き）	13-1
2	16	瓦	軒桟瓦	三巴文	表採	瓦当径 93 内区径 68 周縁幅 13 周縁深さ 9 瓦当厚さ 17	200	巴（左巻き）	13-2
3	5	瓦	軒桟瓦	不明	表採	前幅（114）後幅（65）長さ（299）平部厚さ 17 高さ 38	1180		13-3
4	1	瓦	輪違い		表採	前幅（80）後幅（25）長さ（128）高さ 50 厚さ 20	260		13-4
5	9	瓦	伏間瓦（箱冠）		表採	幅（108）長さ（167）高さ（62）厚さ 13～25 玉縁幅（80）玉縁長さ（18）玉縁受け幅（-）玉縁受け長さ（-）	640		13-5

図中番号	遺物番号	種別	種類	遺構・層位	生産地	器種	製作年代	口径（mm）	底径（mm）	器高（mm）	釉薬・文様等	備考	写真図版
写	17	磁器		表採	肥前	端反碗		(-)	(-)	(31)			13-6

第 40 図　沢門下石垣前面採取遺物

4. まとめ

昨年度の清水門北側石垣に続いて、沢門下石垣で、東日本大震災後の現況データを取得することが出来た。今回の調査と、1 次調査測量図の比較からは、間詰石の欠損箇所および築石の一部変状箇所はあったものの、石垣の孕み等の危険な変状は、認められないことを確認した。

沢門下石垣は、主に自然石を使用する野面積みの石垣であり、慶長期にみられる積み方で積まれている。沢門下石垣がある、巽門跡から沢門跡へと抜ける登城路跡は、築城期の大手道とする考えもあり、沢門下石垣自体も古い時期の可能性が高い。また石垣面で、目地が通らなく、石材の大きさや積み方が若干異なる箇所が見受けられることから、積み直しが行われた可能性がある。

今回は測量調査であったため遺物は出土していないが、沢門下石垣前面で陶磁器や瓦を採取した。陶磁器は数点だけであるが、瓦は比較的量が多く、軒桟瓦や塀瓦が散布していることから、沢門下石垣上面にあった、塀に伴う瓦の可能性がある。

引用・参考文献

織豊期城郭研究会『織豊期城郭資料集成Ⅴ　戦国・織豊期城郭の石垣』 2019
仙台市教育委員会『仙台城本丸跡 1 次調査　第 2 分冊　遺構編』仙台市文化財調査報告書第 298 集　2006
文化庁文化財記念物課監修『石垣整備のてびき』同成社　2015

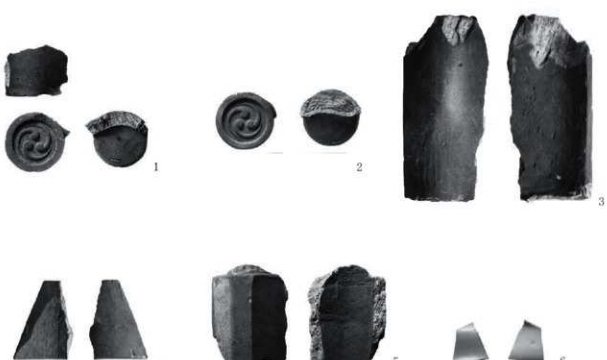
図版 13　第 37 次（沢門下石垣）

沢門下石垣全景（北西から）

沢門下石垣全景（北東から）

石垣東側（北から）

石垣中央部天端石の変状箇所（北東から）



1 ～ 5　約 1/6、　6　約 1/3

報告書抄録

ふりがな	せんだいじょうあと
書名	仙台城跡 16
副書名	―令和２年度　調査報告書―
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 493 集
編著者名	須貝慎吾、加藤智仁
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒 980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目５番 12 号　上杉分庁舎　TEL 022-214-8544
発行年月日	2021 年３月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
せんだいじょうあと 仙台城跡 とくらみち 登城路跡（４次） ［第 35 次調査］	みやぎけん　せんだいし 宮城県　仙台市 あおばくかわうちもない 青葉区川内地内	04101	01033	38° 15′ 19″	140° 51′ 27″	2020. 5. 11 ～ 2020. 10. 9	104 ㎡	保存目的調査
せんだいじょうあと 仙台城跡 さんのまるだい 三の丸土塁（６次） ［第 36 次調査］				38° 15′ 25″	140° 51′ 24″	2020. 5. 11 ～ 2020. 10. 9	60 ㎡	
せんだいじょうあと 仙台城跡 さわのもとしたいしがき 沢門下石垣（２次） ［第 37 次調査］				38° 15′ 17″	140° 51′ 21″	2020. 7. 2 ～ 2020. 12. 18	126 ㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡	城館跡	江戸時代	石組溝、暗渠、石列、集石遺構、堀跡	陶磁器、瓦、金属製品	巽門跡北西の登城路路面と石組溝を検出

要約

国庫補助事業として仙台城跡第 35 次、36 次、37 次調査を実施した。調査の結果、第 35 次調査の登城路跡では、２時期の硬化した整地面を確認した。これらは登城路の路面であると考えられる。路面下には、豊富な湧水を処理するための暗渠や石組溝跡も見つかった。第 36 次調査の三の丸土塁では、２時期と考えられる石列遺構を発見した。土塁上面にあった堀の基礎と考えられる。また、遺構の検出状況から、土塁が一度かさ上げされていることも明らかとなった。第 37 次調査の沢門下石垣の測量では、石垣の現況のデータを得ることが出来た。このことにより、平成 16 年度に行った測量成果と比較することが出来るようになり、震災による影響が少なかったことが明らかになった。

仙台市文化財調査報告書第493集
仙　台　城　跡　16
－ 令和２年度　調査報告書 －
2021年３月
発行　**仙台市教育委員会**
仙台市青葉区上杉一丁目５番12号
仙台市役所上杉分庁舎
文化財課　TEL 022（214）8544
印刷　株式会社 **仙台紙工印刷**
宮城県仙台市宮城野区苦竹三丁目１－14
TEL 022（231）2245（代）